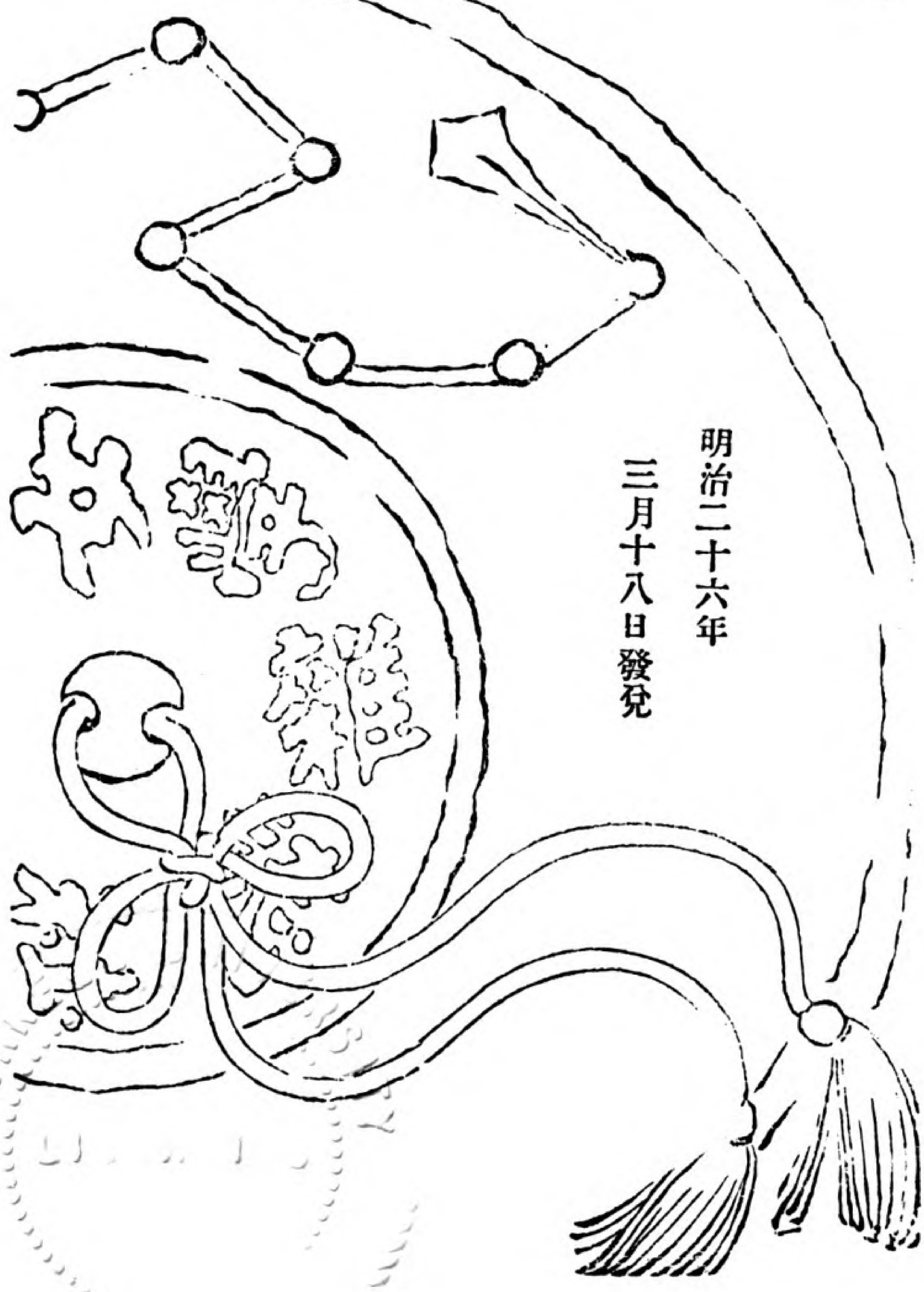
女學雜誌

第三百四拾號

乙の巻



明治二十六年
三月十八日發兌

注意

本號にはウェスト女史の詳傳と目下熱烈の時事問題たる、久留米置娼論市會討論の詳報と其他、ウィラード女史か日本を懐ふの書簡、ひろひ見（若松賤子譯）の完結等あり。

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號（第三百四十號）目次

○社說　希臘孝子腓立比物語を讀む。奬學金候補者試驗。赤表女學雜誌の事
○見藍　ひろひ兒（完結）若松しづ子
○雜錄　古昔物語（秀吉の度量、家康の用意、）ウイラード女史が日本を懷ふの書簡
○家政　馬鈴薯は移住者を起す。馬鈴薯を常食に用ゆる調理法。田家のこよみ。園藝法、
○警告　久留米置娼論顚末
○史傳　ウエスト女史の詳傳
○通信　數件
○女報　數十件

前週（第三百四十號）白表

○社說　政界將來の合縱連衡○遠征壯圖○慨世私言を讀む
○雜錄　新土佐日記（はしがき、新職命）○海石榴舍歌話第二（くすしの歌よみ）○信仰と愛（山月子）ウヰルヘルム、テル（橋本嘯月）
○史傳　亞拍罕（完結）
○小說　蛇物語第二（花圃女史）○ローレンス（若松しづ子）
○批評　基督信徒のなぐさめ○文明雜誌○依田百川自傳○千島拓植○ロード、テニソン○支那と一戰せざる可らず
○片々

赤表　女學雜誌　改進

白表女學雜誌の改題と共に。赤表の女學雜誌も亦た多少の趣を添えんと欲す。今豫かじめ一々之を告げず、實際の呈色何如んに依て、知己の愛顧を得んとを望むの情切なり。冀はくは、改巻后第一號の出るをまちて、叙むろに惠評を垂れよ。

評論の新發兌と、此赤表女學雜誌の改進と相待ちて双らび行はれんとを期す。赤白茲に手を分つと雖ども、其新に装ふて出るの日同日ならんとを樂しみとす。故に、次號の赤表來月一日に發行すべきを一週延引し、評論と共に四月八日に於て出版すべしと豫告す。

在昔吾黨時務に慨する所あり微力を當世の用に獻ぐるを決し初めて女學雜誌を刊出せしより此の方既に九年を經たり。熟ら惟みれば日月流水に均しく春秋華と同もに消盡せり。此間屢ば世と相逆ひ幾度か困躓せりと雖ども而も尙ほ叙々として長成したる所以の者は偏えに世上に知己ある社內に同志の助力彌よ加わりたるとに因れり。於此乎吾黨は各人手を分ち彌よ深く各部を搜りて以て知己の覽に供す且つ初來長年の期望を達せんとを欲せり。先づ「女學生」を別置し近頃之を擴張して「文學界」となし次に白表赤表の二色に分ちて兩々相對せしめたる者は即はち此の故也。而して如今機到りぬ當に赤白をして分袂獨步せしむべしとて輙はち玆に白表女學雜誌に別題を附し改めて「評論」と稱す。

白表女學雜誌改題

評論

隔週発兌

四月八日第一號發

「評論」の期する所は女學雜誌生來の所則と異なるとなし但だ之をして彌よ專らに益々深からしむるとを許す耳。故に其主義依然たれば更めて辨ずるとを要せず其裝ひも亦俄然的變すべくもあらずとは云へ今後特に力を盡して新に一生面を開く所の者は、時務を談じ社會を觀ずるの事を一層廣くし深くし且審らかにする事、並に神學道話の欄を設けて修養自省の道を明にする事、史論評傳を緻密にして人生の眞相を示し世事革新の要理を一層細論する事、海外の思潮流勢を指示し我國の對外道を辨ずる事等にあり、其他多少の新案ありと雖ども今一々之を記さず冀くは出刊の日に於て讀味あらんとを。

四月八日以后隔週發兌一册定價六錢　郵稅五厘

東京下六番町六番地

女學雜誌社

島田三郎君
巖本善治君　同著

公娼可滅

正價金四錢
郵税金二錢

本書は廿三年三月五日、木挽町厚生館に於て廢娼大演説會を開き、其際に賣捌きたる入場劵の餘金を以て本書を出版し、同日の演説の趣意を普く公になさんが爲之を實價にて分たんとす。

島田三郎君　故植木枝盛君

廢娼演説

正價金五錢
郵税金貳錢

本書も亦明治廿二年十二月九日、厚生館に於て、島田三郎、故植木枝盛君等が、なしたる廢娼演説の筆記なり。

安枝武雄君編輯

廢娼同盟會演説集

正義の反響

正價金十五錢
無郵税

目次

○開會の辭　飯野吉三郎
○姦淫に對する社會の良心　宮川經輝
○賣奴の弊風再燃せんとするを防ぐべし　大江卓
○一女數夫　根本正
○家庭　横井時雄
○快樂の源を潔くべし　金森通倫
○廢娼論の利害　イビー
○賣淫に對する社會の思想　植木枝盛
○余が所謂廢娼論　三宅雄二郎
○所感　ロッピンソン口演　小方仙之助通譯

發賣所
東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社

女學雜誌 第三百四十號 明治二十六年三月十八日發兌

社説

希臘孝子腓立比物語を讀む

友人櫻井明石君、居常君臣父子夫婦の道を辨正するを以て任とし、多年孝子忠臣の跡を尋ねて嘗て倦むとあらず。曩に貞女お石の傳を編して、女學雜誌に附録せしめたるが如き、其一斑に過ぎざる耳。明石君は夫れ古の武士か。其節義の廉直なる、其言動の愼肅なる、其文章の莊重なる、余は君に於て古武士の典型を見る。然れども、君は單に古の武士たるにあらざる也。武士にして靈洗を領し、一變してナザレのエスの爲の勳爵士たるもの誰ぞやと問ふ人あらば、余は君を指ざして、是れ其一人なりと確答すべし。

基督の世に顯現せるは、天の義なり。基督の人の爲に死せるは世の愛なり。基督の敎こゝを以て愛と義とを重んず。既に義と愛とを重んずるの宗敎にして、忠孝貞節を輕んずと云ふものあるは誤解にあらずや。如此き論士は、基督敎の人を見ざるもの也。亦、基督敎の書を讀まざるものなり。余は、其偏見短識なるを惜しむ。

明石君、去年、希臘孝子腓立比物語の譯あり。余、其文稿を借覽し、一夜卷を措かずして通讀せり。腓立比が、其父を救わんとして、單身王城を出で、或時は漠々たる千里の砂原を横ぎり、颶風に倒れ、盜手に縛せらるることを讀み、或時は渺茫たる万里の太洋を航して、船難に半死し、誘惑に眩迷せんとするの狀を讀み、又或時は長途の望正に達して一縷の縁既に斷たるの慘況に驚ろき、忽然天恵雨の如く下りて廉潔の德世福を塵の如く拂ふの高潔に歎じ、幾度か淚襟を潤ほすとを覺へざりき。則はち、之を書生に示して廻讀せしむるに、書生皆泣けり。嗚呼、腓立比の如き堅信は世多くあらず、而して又腓立比の如き篤孝は、稀に見る所なりとす。誰か、基督の徒、君父に篤からずと謂ふや。信徒の上帝に對する時、之を天父と云ひ、基督に對する時、我主と云ふ。蓋し、父と云ひ、主と云ふものの外、世上他に尊重親愛を極むべきものあらざるが故にあらずや。

余は、腓立比物語に感激し、明石君に勸めて之を世に公けにせしむ、世上の讀者もし之を熟味し、余と同一の感を懷くあらば、請ふ、之を、基督の臣、天父の子たる、明石君に向ふて謝せよ。余は、茲に本書第一通讀の榮を得たるとを陳謝するもの也。

○奬學金候補者試驗

日本婦人の爲めに、米國婦人の創立したる奬學金候補者試驗の期既に近づき、いよ／＼來る廿八日以後四日間、東京の明治女學校、西京の同志社女學校、其他便利の箇所に於て、同時に施行せられんとす。蓋し、此の奬學金は、米國の有志婦人が、日本女學の進達を冀がひて、金八千弗を募集し、此毎年の利子四百乃至五百弗を以て、一人の高等女學生を敎育し、四年間に、ブレンマー女子大學、ペンシルバニア女子醫學校、ドレキセル學藝學校の四大學中、一を撰みて業を卒ふるとを得しめ、則はち我日本に歸りて高等女子敎育に盡力せしめんとするの計畫なり。米國有志婦人の厚意一と方ならず、吾黨遙かに感謝の念を寄せて、今に至る迄止まず。

然るに、右八千弗の利子四百乃至五百弗は、洋行すべき女生の爲の食料、受業料、及び書籍料に宛て、餘分あるとなければ、其衣服料及雜費として要すべき年金凡そ二百弗、並に渡航の旅費及そ一百五十弗は、右女生の支辨する所たるべきなり。よりて思ふに、毎年の衣服料及雜費は、其家族の仕送りもしくは自己の勞働によりて追々支辨するとなさんに、必らずしも望なきにあらず。但だ渡航費に至りては、一時の急用にして、之なきものは、則はち候補者たると能はず、假令ひ候補者として試驗に及第すとも、之が爲めの一事を以て、渡航の榮を受ると能はずとせば、遺憾極まりなきものにあらずや。

よりて、右奬學金の爲の日本委員は、一百五十弗を限りとして、本邦有志者中より、義捐金を募らんと欲すとぞ。彼の米國婦人諸氏は、千里海外の異邦の爲に、金八千弗を擲うてり、我國女學に志あるもの、何んぞ金一百五十弗を喜捨するとなしとせん。○謹告す。異邦の人の義心に感激せらるゝの諸君、日本女子高等敎育に執心せらるゝの諸君。冀はくは、其仁心を寄せて委員諸氏の訴ふる所を嘉聽せられんとを。

而して、吾社は喜んで其の義捐金を委員諸氏に傳達するの勞

を執るべし。

○赤表女學雜誌改進の事

吾黨が言ふ所ろの「女學」なるものは、單に女子の學問と云ふとは異なる。是れ、夙に、辨明し、主張し、而して多年其主義を發揮せしめたる者なれば、今更めて言ふとを要せず。此故に、海外の列邦に對し、又邦内の万業に對し、苟くも女學の精神を吹込み、女學の主義を發表すべきものありと認めたるときは、九年前來、有する丈けの力を献げて、其用を勉めたり。

幸にして、知己世上に増し、同士社内に加はり、各人手を分つて專門の科を擔當するを得るに至りしかば、曩には、女學生を置きて、青年女生の文學に助力したりしが、近日更に擴張して「文學界」となしぬ。又、曩に、女學雜誌を赤白の二色に分ち、各箇勞を分ちて硬軟表裏の二方に相對せしめたるが、今や機至れりと信じて、茲に、白表女學雜誌を改題して「評論」と稱し、其傾向を一層に長引して、いよ〳〵社會上、政治上、神學上、道德上に、女學の精神を發揮せしめんと欲す。

此に至りて、赤表女學雜誌は、唯一の女學雜誌となりぬ。之より以后、其論ずる所ろは、大ひに、政治上、社會上の分子を減ずべし。もとより毫も之に筆を挿入せずと云ふにあらねど、尤とも多く力を盡す所ろは、女子の教育、家政の調理、婦人の交際、賢女の模範、育兒、看病、内助、女工、其他百般の婦人の事業等の事を記すにあらんとす。

九年前、女學雜誌の初めて世に生れたるより此の方、相續ひで世に現はれたる同類の雜誌少なしとせず、或る時は、一時に十五六種の仲間ありて、女學の界ひ太はだ振やかなりしに、其后落々として追々に失せ行き、常年の佳人既に白骨となりしもの多し。

而して、新たに代りしもの亦多し。目下世上に時めける婦人雜誌少なからねば、女學雜誌の如き、最早生き存らふるの要なきが如けれど、多少別種の所信ありて、之を同胞姉妹に言はずんは止む可らず。故に、不肖を忘れ、時世を思はず、敢て倘ほ老身を提さげて愈よ世界に盡力せんとは欲す。

茲に第十七卷正に終り、次號より新に卷を初めんとす。冀くは、多少、新しき裝を以て諸君に見ゆるを待てと啓す。

兒籃

ひろひ兒（完結）

しづ子

おきくは人にも苦勞をさせ、自分も苦勞をし升たが、誰よりもおうらが好で、こんな好い人はないと思つて居升た。さうして子供ながらも、雨が降りつゞく時や、風が吹あれる時などには自分が淋しく、苦しく、道ならぬ世渡りから救ひ上られたといふヿがボンヤリと心に分り、どこまで行つても落着く家なく、お腹はへり、寒くはある、人には、構ひつけられぬといふよりはかふしておうらどんとお奇麗なお台どこに暮らすのはどの樣に好か知れぬと思つて居升た。嚴し過ても躾をすれば好い結果は必ずあるもので、おきくも暫くする內に自分が悪いヿをしなければ決して責檻されはしないといふヿが分る樣になり升た。幼少の折から無理非道に扱かわれつけて身の爲になる責檻といふヿは一向に知りませんでしたから、わるいヿをした時の外は責檻されないといふヿは此子供にとつては近ごろの發明で、かふ覺へてはわるいヿをするも大層稀になり升た。それで噓をつく癖も直つたらうと家の人たちは悦んで居り升た。

さておきくは近ごろは大層音なしく、叱られるヿも極く稀になり升て、嬉しい年月を送り升た。夏も早く過ぎて秋の木の葉の散る時分御新さんはおきくにやらうと思ふ殘り少なになつた甘なつとうを菓子皿から紙へ移し、さて台處へ來て、一寸それを鼠入らずの上へ載せ、使にやつた二人を待つて手を開けて居らつしやる內、間もなく二人は歸つて來て、おうらは靑物やら干物ものやら風呂敷包から出して、おつりを御新さんの前へ幷らべてクド〱と銅貨や靑錢の勘定をして居る內に格子戸がカラリと開いて、近處のかみさんが御新さんに端書を讀んで貰らひに來たとおうらの注進するに、御新さんは立つて玄關へ行き、用を濟ませて歸りながら鼠入らずの上へ置いた甘なつとうのヿを思ひ出し、フト其上を見れば、何れへか影をかくしたので、米櫃の上をさがし、板の間を尋ね升したが、どこにも見ませんかつた。御新さんは少し嚴格にきくや、一寸こゝへおいで、おまへさつきこゝへ歸つた時

鼠入らずの上に包んだものを見たかへ？
子供は何氣なく、二ッの少さな手を膝の上へ載せたまゝ
エー、見升たよ。
そんなら、それがどこへ行つたか知つておいでか？
いゝへ、知りません、ちつとも知りません、
とこたへて、御新さんの權幕に恐ぢてか、顏から領元まで眞赤になり升た。うらはまたしてもと氣を揉み、
アレ、きいちやん本當のといふ子、ほんとさへいへば、御新さんも腹立つしやらないもの子、ほんとのといふ子、サ、直子。
と急きたて升た。おきくはワツト泣だし、
でも、本當いつたもの、本當だもの—
と言張り升故、おうらは板の間や米櫃の上、ねづみ入らずの向ふなど殘る隈なくさがし求め升たけれど影も見えませんかつた。して見ればとる人なく消えてしまふ筈はない、やつぱりおきくが食べたのだらうと主婦も下婢も思ひ込み升た。御新さんはいよ〳〵血相をかへ、
サア、きくや、おまへほんとうにあの甘なつとうを食べたとさへいへばよし………
だつて食べないんだもの、そんなものたべたかないや、食べやしないや。
腹をたてゝはいふ言葉さへ平常が音なしい樣子とは全く違つて居り升た。
ソラまた始まつた、いけない子、おうらや、また仕置をしなければなるまいよ。
とはいつも用ゐる責檻の棒を持て來いとの命なれば、おうらは板の間へまろびて泣叫ぶおきくの耳に口をよせ
ほんとうのとをいつてしまはないかへ?.エ、え、
といつても、泣く聲の外返事も聞こへねば、據なく泣〳〵棒をとりに行き升た。おうらは萬一たべないで、其紙包がまたどこかにありはせぬかと、キヨロ〳〵見廻り升たが、おきくが餘りにすねてだをいふ故、辨護さへ出來かねて、とう〳〵仕置をされ升た。おうらは近ごろおきくが一度も嘘をいはなかつたのが、けふはまた躾がひもなくと思つて、一層悲しくて堪ませんかつた。さて責檻されて一時間ほど立つた後御新さんが出て入つして、本とうを白狀したら勘忍して、おうらと

お使に一處にやつてやると仰つても、おきくはどふいふものかいつもになくすねて後ろ向きに壁へとつゝき、すゝり泣をして一言も答へませんかつた。

そんなら……うらや、おまへ一人で行つておいで、きくやも一處にやる積りだつたが、そんなに强情をはるなら、仕方がないからうちに獨りでおいでなさい。

おうらは一人して出て行く處をおきくがソツト覗いて見ると今度はおうらどんまでこはい顔をして怒つてゐる樣でした。おうらはいつてしまい御新さんも奥へ引込んでおしまひなさい升た。此日は珍らしく朗らかな天氣で、後ろの庭を眺められる臺處の戶が開いて居り升た。始めおきくもシク〳〵と泣いて居り升たが、子供のヿ故、悲しみも長くは續かず、泣シヤクリしながらもソロ〳〵遊び始め升た。暫くすると、板の間を小走りする足に一寸引かけて、奥からさげた御新さんのお湯呑をコロ〳〵と流しへ落し眞二ツに割つてしまい升た。可愛そうにおきくは口を開いたまゝ突立つて、顏色はまるでなくなり升た。その內どうやらこちらへ來る足音がする樣な心地がして、開いた戶を幸ひ、庭へ駈け出し、庭から外へ一散に走り行升た。庭木戶を閉ぢると共に此小女の一生の運命は定まつて、折角覗きかけた淸きホームも幸も、正しく幸福な生涯の望も一瞬時に全く消えて仕まひ、それと共に常途なく、つれなく、悲しく、汚れたる世渡に陷り升た。おきくは逃亡しまして、其行先を知るものは有ませんかつた。一人の百姓は夕ぐれ、日の入る頃に野原で見掛たれど連れのあると思つて、何の尋ね立もしなかつたといひ升た。時のたつと共にさま〴〵おきく女のなり行に付て噂するものが有り升たが、確としたヿはとう〳〵分らず、夢の如くに來て、又夢の如くに消えてしまひ升た。おうらが一人ツクチンと火鉢の側に坐つて可愛いゝ子供のヿをおもひつゞけ、戶をたゝく音がする、もしやと急ぎ戶を開いて又しても風に欺されたと叩く夜が幾よさか分らず、御新さんは今は子供の强情も吾まゝも何もかも忘れ、たゞ可愛かつたと、音なしかつたと計り思ひ出し、風の日も、雨の夜も安き心はなく、床についても野宿して風雨に暴されるきくやのヿが思はれて寢るヿを忘れる位でした。

併し御新さんはわるいヿをしたと自分を咎める心持は有りま

せんかつた、あの兒を拾ひ擧てやつたは慈善で、宿なしを一夜さ泊める人さへ尠ないに自分は引うけて世話してやつたのだ、折檻するも何ぞ其子へ對しての慈悲で、決して自分の過りではないと斗り思つて居升た。

すると二月、三月過ぎて、おうらも稍くおきくの居ないに慣れ始めた頃、御新さんがフトある日棚の上の空瓶を下ろし中を見ると、アラ不思議、おきくがたべたと斗り思込んだ甘なつとうの包みがチヤント中に這入つて居升た。御新さんは一寸暫らく氣が遠くなるほど驚ろき升た。よく〳〵心をしづめて考へて見ると、此かめは丁度あの忘れもせぬ日、米櫃の上にあつて、二人が買物して歸つて來る時、干物ものを載せるに邪魔になるとて奥さまが蓋をして我と我手で棚へ上げたのでした。今となつては其覺へはなけれど、多分其時袖がさわつて、くわし包はあき瓶の中に落たのを知らずに片づけてしまひ、一途にきくやの處置と思ひ僻め、辨解の出來ぬ幼兒に濡衣を着せたものとしか思へませんかつた。此婦人の心の悲嘆！實に思ひ遣られ升。正義を敎ふるが爲の處置が却つて大の不正になつて、此上もなく弱く、此上もなく愛す可く、心を盡して保護す可き幼兒の一生を過まらせ魔界におとし入れたとおもへば其なげきは實に慰藉のない歎きでした。罪を犯して償さへ出來れば、まだしもと同じヿを繰反し〳〵喞ちつづけ升たが何の詮も有ませんかつた。邪推。邪推ほど罪の深い罪は有升まい、寧ろ人を好く思ひ過ぎて、人に欺むかるゝが幾倍の増でせう！啻に覺へて置度ヿは人を愛するといふヿが義の骨頂なるヿと慈悲に勝る掟はないといふヿです。

雜録

今昔もの語り

○秀吉の卓落

秋玉庵輯

秀吉は一方に機智百出人を籠絡するに足るの技倆を有すれども、亦一方には至極磊落なる處ありて往々人の願を解き至て愛敬ある大將たりしとは何人も知る處なり。其小田原城を攻落して奥州へ巡廻したる時の事とかや、相州鎌倉を見物なし鶴が岡の八幡へ參詣し、白幡の宮へ詣でたりしが、戸を開かせて賴朝の像を見、莞爾として社壇へ上り木像に向ひいはる

るやう、日本ありて以來微少なる身を以て天下を討ち平げ、容易く四海を手裏に收めたるものは唯御身と我とあるのみ。然れ共御身は是多田滿仲の后胤にて、王氏を出でゝ遠からず。又頼義、義家なんどいへる武功の人々を祖先に持ち夙に東國の士に望を囑せられ居しかば、假令一旦流人となり居しとても猝然手に唾して蛭子島を出るや、祖先の餘澤にて關東の武士雲の如く來り集り、以て容易に天下一統の階梯を得せしめたるならずや。我は夫れとは大に異なり、身は尾張の土民の子たるに過ぎず、一人の家來もなく半點祖先の餘光をも蒙るとなくして眞に赤手を以て天下を取たるなり。されば我力は御身に勝ること幾倍なりと思へり。御身は之れに對して如何の辭かある。とはいへ御身は實に我好伴侶なり、必ず惡くな聞僻め玉ひぞとて賴朝の木像の肩を打ち、嬉々として出しといふ。眞に洒々たる好丈夫ならずや。

○家康の用意

秀吉の洒落とは事變り、用意周到外温恭の形を裝ひて終に豐臣の覇業を奪ひし家康は、太閤在世の頃より豫て諸大名の心を得置き以て其地盤を堅め居しなり。其一現象として見るべきは、始め關白秀次が太閤の讓りを受くるや、諸大名の心を攬らんとて捨金と稱して多くの金銀を出し之れを諸大名に借し與へたり。而して其后秀次は太閤の意に背きて高野に逐はれ彼處にて非命の死を遂たるにぞ、是に至りては最早貸金の必要もなければ、秀次の金奉行より曾て金を貸し置たる諸大名へ向つて返金を促し、若しも延引に及ばゝ帳簿を具して太閤へ言上に及ぶべしと云ひ遣りしかば、債を負へる人々は大に驚き此事太閤に聞へなば、爲に疑嫌を蒙りてゆゝしき大事に及ぶべしとて早々金子を調へて手形を取戻せしもの頗る多し。此時細川忠興も亦黄金貳百枚を秀次より借受居しかば、急ぎ返辨せんとせしかども、何分火急の事にて如何共調達なり難く殊に當惑して老臣松井佐渡、有吉四郎左衞門を招きて評議したりしが、是とても早速の手筈如何共工夫付難き樣子なりしかば、忠興は心を決していへるやう、此上は是非に及ばず。此方より太閤へ申上切腹して果むには如かずと。松井佐渡暫く沈吟していへるやう、某幸ひ本多佐渡とは至て懇意に候へば、佐渡に依りて内府へ歎願致し試むべし内府は天下一の大名といひ其上賴母しき御心ある方にて候へば、必定相

調ひ申べしといひければ、忠興大に喜びて委細松井に任せたり、松井は依て本多方へ至り此事を談ぜしに、本多も此事は自分一存にては返事し難しとて、早速家康の前に出て言上せり。是に於て家康は松井佐渡を面前に招きさていはるゝやう、越前守殿御難義の由御氣の毒に存ずるなり。夫に付心付たりとて本多に命じて具足櫃二個を取寄せ、自ら懐中より鍵を出して之れを開き具足を取出さるゝに、其櫃は二重底にして更に又錠あり、家康之れをも開きて其中より黄金五拾枚宛の箱四個を取出し之れを佐渡守に渡しいはるゝやう、大名なりとて金銀は誠に不自由なるものなり。若し金奉行の手にて調達せしめむとすれば火急の用に立ず、又折々には人に知らせず使ひ度事もあるものなれば、左樣の時の事を思ひて今より廿一年前即ち我未だ三州岡崎にありし際蓄へ置たりしものなるが我爲には今日まで別段用に立つ事もなくて過したり。今之れを以て不思議にも越中守殿の用を辨ずれば我に於て如何計滿足に思ふなりと。佐渡守依て之れを松井に渡せしに松井は拜受して大に喜び、主人の身上偏に内府の御救ひと此上なき喜に存じ奉る。明日は早速領地丹後の田邊へ申遣し佐渡守方迄御返納申上べしといひたるに、家康首を左右に振り其は以ての外の事なり我今此金を越中守殿に用立たりといへば、我身の爲にも宜しからず、又越中殿の爲も惡かるべし。其故にこそ予は人の知らざる金を以て進上致すなり、必返濟は無用なり。此一義は我と本多、貴殿の外には何人にも知らしむることあるべからず。互に言ひ捨聞き流しとし今日此席に限るべしといはれしかば、松井は其厚意骨髓に徹して嬉しく、感涙を流して立出しが此金子を以て忠興は難を遁れ以て事なきことを得たり。之れが爲め忠興は家康に對して深く恩義を記し以て關ケ原の戰にも身命を抛て盡したるなりといへり。是等の仁愛家康の性質に基くとはいへ、又英雄の心を攬る方略ならずといふべからず。

○德川齊昭の儉德

水戶公齊昭常に儉約を重じ木綿の服の外は着用せられず。故に、幕府より拜領の時服數十襲徒に倉庫に塡充するのみなるを以て御納戶役より御用人を以て此由申出、若し之れを御用ひに相成る時は、新に木綿御買入なくとも、四五年は御用相濟申べし、是却て大なる御儉約になるべき事と恐ながら存上

奉ると申せしに、齊昭答へていはるゝやう、夫れは平人の儉約といふ事なり。我等の儉約は甚異なり、我は一國の主として臣民に臨むとなれば、我行は即ち家中の者の摸範となる事なり。予は素より絹服にて人となりたれば、着心も能く又有合せの品もあるとなれど、是を家中の者の眞似たらむには國中の儉約は如何あるべき。故に予は假令有合せなればとて綸子などの服は用ゆべからず。是即ち予が爲すべき儉約の道なり。納戸の心付は尤なれ共用人などは是等の邊をも心得べき事なりと論されしとぞ。是等や眞に儉約の心を得たるものならずや。

○隱すより顯はるはなし

加藤清正は太く飲酒家を嫌ひしかば、清正の家來中酒を好めるものと雖も清正の前にては下戸の眞似を爲せるものも多かりしが、其が中に坂川忠兵衛といへる侍あり。此者至ての上戸なれども常に一滴も給べ得ずと僞れり。故に清正も全くの下戸なりと思ひ居たりしに、或時清正の家中上下共に擧て城中にて料理を賜はりたる事ありて、此時坂川も亦其席に列なりけるが、坂川の右脇に坐せるは玉庵といへる醫師にて、此者は上戸を表て向きになし居ければ何の遠慮もなく、大盃にタプ〳〵と酒を受けて飲み居たり。折しも清正は主人役にて一同の席を見廻はり居しが玉庵が大盃を控へ居たるを見て其盃にて今一つと强ひけるを、坂川は己れの事と心得玉庵が控へ居たりし大盃を取りて一杯の酒を一息に飲み乾然る後始めて他人の盃なりしとを悟り大に後悔したれ共最早其詮なかりしといふ何事にても隱す事は却て顯はれ易きなり。

ウイラード女史が日本を懷ふの書簡

左の一文章は女史が近頃ろ英國より米國の同士に宛て、送りたる書簡の譯なり之によりて、遠からず同女史が日本に來ろの精神を察知し、又た其我國を慕ふとの淺からぬよしを推了すべき也。

親愛なるわが同盟諸姉に申上候、左に差し送り申候書面はウエスト女史か日本なる四日市にて禁酒會を組織し其の會長に指命せし人より送り越せしものに御坐候、書面は簡單に候へども其の內に言ふべからざる感慨を含み居り候事言外に明らかに御坐候、ウエスト女史も天國にて誰れかわが跡を次て立よと言つゝあるやふ感じ申て、是非〳〵誰れか參らねばならぬ事と存候、私事も今後二年を出でずして日本を始め諸國巡

回致す心組に候へども、夫れに先き立ちて目下急に一人出立致しウヱスト女史の跡をつゞくる事必ず〳〵必要なる事と信じて、何人が適任に候や、名譽ありて才識ある人を撰び猶數ケ月日本に働かしめなば其の結果必ず大ならんと豫期致し候何卒此の件に付きオハヨ州なる世界婦人矯風會書記ウードブリッヂ夫人、幷にカナダ婦人矯風會會頭ウヰリアムス夫人と御相談被下右出發を何人にか御定め有之度願入候、何も斯く遠方に居り候事なれば宜しく御取計らい願上候、此の事に付てはソマセット女史幷にアンナ、ゴルドンも同感にて二人も共々に右樣願入候、會員の多數も異存無之事と存候尚只今英國にては政事上に禁酒的の運動を致すに尤も必要なる危急の時に御座候えば寸時たりとも猶豫ならず候故右の件諸姉に宜しく御依賴申候、會員の方々に宜しく御傳聲被下度何れ博覧會開會の節は拜眉を得る事と存候草々拜具

英國ロンドンにて、ウヰラード

白標同盟諸姉御中

警告

久留米置娼論顛末

去年社員が九州漫遊の途次、福岡縣下久留米に到りし比ろ、新に妓樓設置の論ありき。然れども、之に反對せる正義の士少なからず、縣廳の書記官も決して認可を與へまじき由の説ありしが、當時置娼論者は陰然計を運らして、同主義の人を市會議員に推の準備怠りなかりし。果然今年に至りて、市會に建議あり、正邪黒白の討論は扨置き、單に起立の腰の數を以て、此の忌はしき建議を可決したることそ殘念なれ。然れども、縣下大躰の輿論は既に定まれり、知事は決して之に向つて認可を與へまじき也。而して、知事をして此の勇斷を爲さしむるや否やは、大ひに正義の徒の盡力如何に關す。諸君いよ〳〵大ひに勉めずんばある可らず。

○其報告書

附言　市參事員ハ非置娼論者ナリ、警部長モ非論者ナリ、市長モ非論者ナリ、輿論亦タ非論ナリ單ニ議員ト一部分ノ人民ナリ。

拜啓陳者當市置娼問題に付ては兼て御配慮被下奉鳴謝候然るに本年再び發生し來り市内紛擾殺氣騰々市制組織以來未曾有の景況に有之候間今其概畧を御報道申上候、

明治廿三年三月の市會に於て久留米市に妓樓を設置するの議問題となり世論囂々の程遂に一名の多數を以て否決したり、其後昨年の市會には京町字小松原に妓樓設置の議將さに議題たらんとするとき我等正義の團結を以て運動し是を未發に防制し得たれば殆んど撲滅の姿なりしが本年も三月二日の市會に忽然市下瀬の下町田中正次郎外數名より置娼の建議出で一番議員岩谷實四郎氏「此問題は多年喧がしき問題なれば議員諸君にも畧ぼ考案はあることならん故に此建議を採用して直に久留米市に妓樓設置するの可否を决したし」との建議説に多數を以て可決し遂に議題となれり、是れ我黨議員の意想外に出でたりし所以なれども實は彼等瀬の下町人民は二三ヶ月以前より隱密なる手段を以て不正甚極まる運動をなし世に云ふ東黨の一派之に左袒し(當地保守の首領と目せらるゝ鹿野淳二、松村雄之進、外西村義三郎、關常光登の諸氏大に盡力し居るとの風説なり)、一方には市長に願書を出し一方には市會に建議をなし一種言ふべからざる情實の網に議員を縛らめたり、此日傍聽席は二三百名余の傍聽者ノヮ〳〵ビヤ〳〵〳〵の聲盛んにして場内騷然たり(其多數は瀬の下町人民なりし)、市長内藤新吾氏は番外席より議員の注意を催して曰く「目下海防の急務眼前に迫り　陛下は御内庭の費を減ぜらるゝの御詔勅をさへ下し玉へるのとき我久留米市は遊惰なる風を生ずる娼樓を設置する如きをなすは恐れ多きことにして假令市會に於て議决あるとも自分は非置娼の意を願書に副申することを滔々演舌せられたり、此演舌には置娼議員も感涙を流せるの有樣なりしとぞ、同日は議長閉會を命じ翌三日になれば市内漸く紛擾し來り開會前に議場に詰め掛けたる人員無慮四五百名の多きに及べり、午點三鐘議會は開かれたり議長は昨日の引續ぎ置娼問題を議することを報告す、先づ議事前に建白書を朗讀せしむ、

非設置論の建白は(明善中學校及小學校教育者團体)、(原古賀町人民山口周藏外數十名)、(莊島町人民大島要二外百數十名)、(櫛原町人民川村作壓外數十名)、(螢川町、寺町、日吉町人民某村二百五十名)、(京山町人民二百數十名)、外青年團体及び一己人より數通

設置論建白(野村龜次郎外數名)、

朗讀終りて激戰は十六番議員吉田惟清氏の口より始まれり、一番議員岩谷との間(場所共舍密云々)にて甲論乙駁連戰の未結局岩谷議員は「前日の辨論は速記錄と相反し居ることも述べたり」、議長は「辨論と精神と支吾し居るやと」問ひ「吉田議員は「建議を採用して議するとき云ふからは瀬の下町より建議なれば勿論場所も瀬の下町と含み居るは當然の理と岩谷議員を詰り、議長は議事錄を一層整理することを告げ閉會を命ぜり、此日岩谷議員の代言的辨論には人皆な冷笑せしなりなし市の重大なる問題なれば取調委員五名を撰擧するの議七番石井議員よりの建議説は多數にて否决せり、

明くれば三月四日此日は可非の决する所議場の摸樣如何にやと傍聽席は立錐の餘地なく凡そ七八百名以上の人數ならん、後れて至りたるものは空しく歸りたるも多りしと、同日は「前日來傍聽席騷さければ本日は傍聽人にして雜閙喧噪を極むれば規則により退場を命すべし」と議長は報告せり、續て下午三點に谷議長は前日の議事を續くことを述べ猶は建議書續々呈出ありたれば一々朗續せしむべしと云ふや朗讀前に緊急動議ありと呼びて起立せしは是れなん設置論の雄將十三番議員古川の正次郎なり正次果して何をか云ふと聽衆靜りて聞けば「建議書朗續の爲め殆んど二時間余を費やし議事は僅かに一時間位にして捗々しからず依て本日は議事の時間を午後八時までに延べんと」の建議は出でたり、反對の者は七番議員石井元助氏の口より發せり、結局採决に至りて古川の建議説多數可决となれり以て知るべし彼等設説論者はどし〳〵議事を進行せしめて大早計にも可否を起立數に訴へんとせし卑劣心を、

同日朗讀したる建白書は

非置娼論は通町長田長次郎外十數名、苧扱川町五丁目矯正會伊東米吉外數名、字高左七郎外數名、第十四區永田爲二郎外數名、田中勘六外靑年數名、戶田才太郎外數十名、米屋所金戶惣代井上辰太郎數町金此惣代、通町伊藤民藏外七十一名、縦横會惣代久保重聽、原大賀町黑岩爲三郎、少頭町惣代豐福太平外數名、田町惣代今村正五郎外數名、鹿子島淸、南薰町小城萬藏外數十名、市田末吉外

數名、松村信太郎外數名、外一通　合計十四通他ニ三通非置娼論あり設置論建白は宿屋惣代三浦千藏外數名、松田季太郎外數十名、三本松町高崎新兵衞外數名、外一通合せて四通右建白書二十一通の內十七通の非置娼建議書は皆な熱血を注ぎたるものにして長文大篇少なからず朗讀時間二時間以上に上れり、故に議長は一先づ休憩を命し午後五時三十分開會、一番議員岩谷は建議說をなして曰く「本日の景況を見るに傍聽者非常に多し若し議を續けて夜間に入らば點燈の用意等大事たるを以て本日は是にて閉會し明後六日は時間を繰上げ午後二時より開會することゝしたし、又々續々提出せらるゝ建議書を一々朗讀すれば朗讀の時間のみにて本議をなすの暇なければ明後日よりは建議書は朗讀せざることに致したしと贊成者多數にて可決し議會は閉されたり、此時傍聽席には朗讀せざるは不信切極まると激昂甚しかりし、思ふに此日は非論者、可論者共に大に人氣立ち居れば若し夜間に入らば一大騷動を起したるやも計られず幸に早く引上げたるは整理上適當なりしと云ふべし、

我等同志は是に於て愈々團結を堅くし飽くまで素志を遂せんことを期し其夜より市下米屋町に非置娼同盟本部を置き運動の中央部とし萬般の事務を處理することに決したり、市內正義の徒群をなして集り來り旗鼓堂々、市中我黨の意見ならざるなきに至るは猶草の風になびくと一般全市の輿論は殆んど非論に定まれり、左れば反稼者は片原町紅粉屋に非置娼攻擊本部を置き牛飲馬食を極め遂には二本松町集產場前廣告臺などには罵詈暴言を列れて我黨を攻擊するの掲示をなし、更に耻づるの色なし、鐵面皮千萬、(傳へ聞く攻擊の文字穩ならずとて警官は一定の時間內に變更すべきを命じたるも變更せざる故召喚したるに召喚に應ぜざれば城崎巡査部長說諭に出張せりと云ふ、後ちは非置娼壓倒本部とせり)、五日の夜の如きは稍々不穩の模樣ありたれば警官は大に注意せらるゝ所ありしとなん聞きぬ、

越へて六日、此日は勝敗運命の决する處、非勝つか可敗けるか、我も〳〵と市內わくが如き狀態傍聽席は午前より立針の餘地なし、開會前には傍聽人の出入を禁ずる位の勢なりし殆んど千數百名の多きに達し殺氣堂の內外に滿ち一言を誤り一事を失せば腕力沙汰にも及ばんず形況なりければ數名の巡査は保護し、町々の四ツ辻などには非常線を張りて保護し居れり、午後二時激戰の陣太鼓は響けり、議長は前日の議事を引續くべきことを報告す、最初に前會に於て决し居りたる速記錄を朗讀せしめ一番岩谷と十六番吉田との間數回の討論ありて結局此の二說の分かるゝ所を採結せしに一番說多數にて場所は含み居らざることに决せり、イヨ〳〵可否討論の關ヶ原に進み來れり、第一先鋒岩谷の將軍一生懸命に置娼の利を說く其論旨は「妓樓を置けば第一、市の繁榮をなし又た市の經濟を助く第二、密淫者を減ずと云ふに外ならず、其論據とする點は大日本私立衞生雜誌に掲載ある長谷川泰氏演說の燒き直したるに過ぎずしかし例の井の角流の輕辯を揮ふて滔々論じ殆んど聽衆をして亦た一人の敵なかるべしと思はしむるに似たり、彼の辯は流暢なり、彼の說は長らしくして或は熱心家の樣に見ゆ、然れども横やりは十六番議員吉田の口より來れり、吉田は岩谷の說を辨駁して痛快、一番亦た駁し十六番辨じ互に論端を開くこと數回にして議長三谷は岩谷に議長席を讓り廿二番席に着き岩谷一番議員を駁するに外國の統計、內國の實證久留米從來の實狀を述べ天下の大勢は廢娼の氣運なるに新設する如き謬見を述べ我久留米は古來工業の最も盛んなる地にして殊に婦女子の職業に勤勉なるは世間已に知る所なるに若し其れ妓樓など云ふ遊惰の念を導き出す場所を造らば工業界に大なる變動を生ずることも市の代表者なる我等は考へざるべからず又た市民は如此不正策を以て市の經濟を助ける如きことは本員の徹頭徹尾同意を表する能はざる所以なり又た製經費に於ける御詔勅のみならず廿三年に　陛下より御下賜ありし勅語に對し奉りても我等議員は不深なる斯樣な問題は否決せざるべからず一方には勅語奉讀式をなして五倫の道を說き一方には其道を破る不潔なる娼樓を置くことを勸勉する如きは以の外の事なり、親と子との關係を破り孝養の道を無にし妻と夫との平和を害し市內の風敎を害する如き場所を設けるは我等代表者の爲すに忍びざる所、又た過日來市長は各町に出張し納稅を速ならしめん爲め勤勉貯蓄の事を奬勵せる位の勢なるに一方には我等議員が置娼の議に同意する如き不信切極まる舉動は議員の本分上本員などは决して爲ざる所以なりと淳々述べ盡して一點も反對者をして駁擊を試むる所なからしむ議場靜肅一人として感服せざるなし彼等悪逆極まる置娼建議者自身さへ「サスが老練家なり成程」と首を廻らさゝるものなかりし、氏の辨論は實に肺肝より迸り出る赤誠より發するものにして極めて空論を去りて確定なる例證を引照して

市民の輿論を重じたる說なれば敵も味方も氏の高潔なる良心には感謝せざるべからざる所以なり、此論には反駁をなすものもなかるべしと思ひの外、出でたり〳〵攻擊論者出でたり、是れなん久留米市會の栗谷入道臼井の正二郞保國なり、君は小首をかたげて暫一暫し叫び出して曰く「情慾の發生するは人の性なり故に之を滿足せしむるの塲所は必要なり、市の一片隅に娼樓を置て其色慾の需用に供給するの塲所とし其淸水を以て立派に久留米中を洗いたい云々」何だか分らん、怪又怪の奇說滿塲爲めに、眠を醒すを得たり、是れ君の辨論のみならず其容貌も預りて力ありしなり、三谷廿一番は辨ずるに足らざれども懇々と說き盡し得て頭上に一針を加たり、吉田十六番少しく駁する所ありし、岩谷議長席を退き三谷議長席に着き第一番の岩谷として裁判官に被告人が辯護する如き辨論をなしたり十六番の吉田は又た少しく駁論を試み結局討論絕へたれば議長は之を可否の起立に問ふことを報告す（此時傍聽人はガヤ〳〵機一髮白か赤かと待かまへて居る）と其結果は

設置論者　十七名　非論者　七名

過半數にて遂に置娼に決せり、

數年間の一大問題は議決し了れり、瀨の下町の人民は欣然として退く、我黨正義の多數市民は慷慨切齒一先づ本部に集會し本部委員五名を置き萬般の事務を處理することに決せり、當撰者は坂本辰之助、淺田六郞、今村秀夫、高原法房、本多平次郞の五名にして六日午後七時より本部に各町より委員一名を出し會議を開き福岡に出張し知事に面會建議するの委員を撰擧することに決せり、目下久留米全市戶數四千四百四十七戶に對し二千七百十六七戶は非置娼論に署名捺印せり、思ふに三千戶以上に今明日には上るべし、是れ我市輿論の定まる所なり、彼等議員は代表者なる本分を失し輿論の傾向に逆ひ市百年の大計を誤るの議決をなせり、彼等は輿論の敵なれば市の激昂甚しく市民と議員との大衝突起り到底議員に辭職を勸告するの勢なれば辭職せざれば調和は六ヶ敷有樣なり、又た區長廿五名の內廿一名は團結して縣知事に三名の委員を出して建白することに決し夢扱川町は協議會にて一丁目より七丁目は非論に決し物議騷然として議員を攻擊す、我市も時事問題の今日ほど熱心になりしは未曾有の事なり、我等は平素の赤心の漸く達し來るを喜ぶ、我黨は眞理は最後の戰勝なりと信じ一層奮勵最初の覺悟に向て運動しつゝあり、我黨の萬歲を唱ふるの日あるべし確信す水は逆まには流れざる也、

三月七日

久留米非置娼同盟本部
坂本辰之助
淺田六郞

史傳

ウエスト女史の傳

一○幼時及び敎育の時代

千八百三十五年の事なりき、ニユーヨークの敎師ゲール氏の發起にて熱心なる基督信徒相集り、米國の西部なる未開の地に殖民し基督信徒の市府を建てんとの企ありき、此の計畫は忽ち多の贊成を得終に一隊を組織するの運に至り、共に〳〵手を携へてイリノイ州のノックス郡に來りしは、翌年の二月なりしとか、玆處に一隊は粗末なる家を建て樂しく日々の仕事を勸め居たりしが、其の內に此の組の長とも仰がるゝ子ヘミヤ、ウエストなる人ありき、此は即ち女史の父なる人にして、氏は此の州に來りし翌年即ち千八百三十七年七月三十一日メリー、アレン、ウエストを擧けたり。

女史は此の基督信徒の市府に生たれば、稚き頃より朝な夕なに敎の話を耳にせざりし事はなかりき、是ぞ女史をして後來

身を傳道の爲めに捧げ、死を異郷に遂げしめし原の力とは知られける。女史は小學校にありし頃より快活にして敏捷に能く學び能く覺へけり。十三歳の頃既に大學に入るの力ありしも年齢に定ありて許されざれば、暫時地方の學校に教師となりて後ち大學に入り、千八百五十五年十八歳にして卒業せり、斯くて同大學豫科の教師となり、次でクールスブルグの學校に聘せられぬ。此の時は即ち米國内亂の始めとて、此のクールスブルグの市府も奴隷禁止の主義を執りしかば、數多の里人は此處に入り來れり、左れば此れ等の土人を教育せんが爲めにして特に學校を起し七歳以上三十歳以下の里人を入學せしめけり、女史は擧げられて其の教師を囑托され熱心其の教育に從事する事となれり、是れ實に女史が奴隷賣買に反對の主義を建て、傳道の必要を悟り、一生の大事業を成さしめし基の一にてありしなり。

土人の學校が他の學校と合併せしに及び、女史は市村の高等學校に教授をなす事となり、傍ら慈善の事業に關係し病める姉妹を看護するなどに務めつゝありしが、突然郡立高等學校の校長に擧げられぬ、始の程は却て快からず思ひしが、後ち全力を盡して學校を改良せんとの望を抱き終に此の件を受けたり、校長となりて後は熱心鋭意改良に從事し、秩序を整頓して學校の面目を一新し、四年の任期を終へしが再び大多數を以て再任を要求せられ、止むなく之を引き受け此の度は更に數多の學校を建設するの動議を出し、大に市民の賞讃を博せり。素より女史は何人にも好く思はれしと云ふにはあらず女史は決して不正を許さゞるの人なれば、部下の役員などに不都合にてもあれば直ちに譴責せしかば、斯かる人々は自然女史の敵となりき。

此の郡立高等學校の校長を辭して後は一切教育事業を棄て、更に大なる有益なる而も女史が幼少の頃には夢にも思はざりし好事業に入る事となれり。

二。　女史傳道の精神

禁酒會のあるを知るものは必ず女史の名を知るなり、今は其の事業に付て喋々するを要せざるへし、女史の一生を一言に言はゞ實に完全なる基督信者なりきと云はんのみ、全身皆基督に捧げたるの人なりき、彼のクールスブルグに生れたるものは女子を以て始めとなせども其の精神と事業とよりする

も、女史は此の市府より出でたるものゝ第一なるものなるべし、女史が始めて屬せし敎會は女史を慕ひ後に至りても其の敎會籍を脫するを好まざりき、女史も敢へて此の敎會を出でず、敎會と女史との間、親愛誠に切なりき、此れにて其の人物を察し得べけん、奴隷禁止を初めとし禁酒の事業は素より、其他あらん限り矯風の事業に從事し決して倦む事なかりき。女史は日曜學校の敎師として又力ありき。女史の敎を受くるものは必ず信徒となり、女史に接せしものは必ず敎を悟れり、女史は外國に傳道せん事を深く熱望せしが、母なる人が常に病氣にてありしかば其の看護を怠る能はず、外に出づる事能はざりしも、女史が自ら敎育せし人は數多外國に傳道しつゝあるなり、此の度始めて素志を達し禁酒事業の爲め外國に行く事となり、終に日本にて永遠の境に入りしが、其の臨終も嘗て己が敎育せし婦人リラ、ウ井ラード、ウ井ン夫人の宅にてありしは深き神の攝理のあるが如くに思はる。

女史と一面の識あるものは決して其の風采を忘るゝ能はざるべし、其の笑を含みて樂しげに見ゆる後には世の爲めに悲む淚を隱し、輕快に言ふ滑稽の內には言ふべからざる諷刺を寓し、溫乎たる其の顏は牢獄の囚徒に慰めを與へ、廣き其の常識は道を疑ふものゝ惑を解き、善事とあらば時と力とを惜まず勤め、謙遜を以て人に接し、信仰を以て己を修め、滿身傳道の精神に充ち遇ふ人をして神の道に導かれずと云ふ事なし、若し天國なる生命の書を見るを得は女史が名の下には基督の命を守るものと記されあらん、若し基督の敎を疑ふものあらば、女史の一生は其の眞理なる證とならん、アヽ女史の如き人は此の世にて既に其の榮を受けし後ち天國に於ては馬太傳廿五章に基督が述べ給ひし言の如き報酬を得べきならん。

三。記者幷に慈善家としてのウエスト女史

ウ井ラード女史手記

矯風會の始めて成り立ちし頃より、われはウエスト女史を知り共に此の事業のために働きつゝありしなり、初めてイリノイ州に部會の起りし時も女史は其の發起人の一人にてありき其の頃女史には一人の友ありき即ちウエイト夫人なり、女史が敎育の事業に關はり居たりし時は、何時も此の夫人が矯風會の長を務めつゝありしなり、二人は性質の上よりすれば大に異れる處ありしにも關はらず、常に手を携へ相並びて運動

し何れの集會にも二人が共にあらざりしと云ふ事はなかりき女史は又大學にても優等なる書生なりき、其のノックス大學には今のアンドーバー神學校長カッパー氏の如きペートマン氏の如き名高き人々が交々校長となりて教育に務められしものなるが、其の内より出でし尤も大なる人はウェスト女史にてありき。

われは今も能く記憶せり、千八百八十一年イリノイ州の矯風會々議に女史は婦人の投票權を得んために運動せんとの動議を建てぬ、當時の女子は未だ斯る大問題に對して一定の見識を立てたるものはなかりき、隨て議員は此の建議を可とするもの、否とするものゝ、兩派に分れぬ左れど女史か壇に立ちて其の所說を述へし節には滿塲動き初めて建議の通過は確なりと知られけり、わが目の前には今も此の亡き人の當時の風采のちら付き居るなり、女史は凛乎たる容貌と熱心眞實なる風采とをもて述べ始めたり、女史は言ひぬ「われは今日まて未た是れ程明晰なる眞理を見る能はざりき、われ等か斷して此の運動に從事すへきは恰も天より來れる聲の如くにわれに感す」と、又た言へり「わか此の眞理を見たる時は、嘗て基督信徒となりし時の如き感を持ちたり」と、斯くて最後に「われは此の大問題の狂瀾の中に飛び入り、泳き得んか將た沈まんか、生死を此處に决せん」と、言ひ放てり。女史か此の演說は如何に會員の心を動かしたりけん、此れ實に本問題の决する處にてありしなり。

是より後は女史か大方の人々より望を屬されし教育の事業を捨て矯風の事に身を捧くる事となり、四方に遊說して其の基礎を置き、後ち暫時にしてメリー、バニスター、ウヰラードの跡を次きて「ユニオン、シグナル」の主筆となりぬ、是より先き此の雜誌は既に當時の文學社會に知れ渡り改革主義の雜誌の隨一なるものなりしか、女史の入りてより一層に力を增しぬ、女史は社說を始め小兒欄片々の小篇に至るまて、能く注意して整理し、一段の光彩を雜誌の上に與へたり、われは未た女史の如く編輯に妙を得たるものを雜誌記者の内に見しとなし、材料に欠乏する事なく事務に倦む事なく、矯風の目的を達して雜誌界に永く婦人の名を殘せり、女史は雜誌の外雜書幷に矯風會に關する小篇を多く著せしが、其の內にて尤も注意すへき又尤も大なるものは「小兒の敎訓」と題する一

篇なり、此れ實に女史の名を不朽にするの著述にして世の母、たる人は必す一讀すへきの書なり。

女史は甚くユニオン、シグナルを愛せり、其の發行の初めより理事員となりて盡力し己か給料を捨てゝ雜誌の會計を助けし事さへありき、若し參觀を望む人にてもあらは喜て自ら案内し室の隅々まて親しく縱覽せしむる事を常とせり、其の親切なる誰とて驚かぬものはなかりき、女史か此の雜誌の爲に勤めし事は今われ等の拙き筆にて書き盡し得へくもあらす。女史は又彼の婦人會堂の爲めに盡す所多かりき、其の成立を見るに及はすして永眠せしは遺憾限りなし。

女史は又禁酒病院の設立に理事員として周旋する處多かりき矯風會の會員を教訓し社會に向て運動するの方法を示す事に至りては恐らく女史の右に出るものなかるへし、此の外女史はイリノイ州なる婦人出版協會の會長を兼ねたり、斯の種々の事業に關係せしも、一として其の名を空しくするか如き事を爲さす其の責任を盡し居たり、凡そ如何なる事にもあれ女史は依賴さるゝ事あれは否む能はさるの人にてありき。

人として欠點のなきものはあらさるへし、女史にも一つの欠點ありき、即ち女史か力の及はぬ迄に働くの癖ある事なり、實に女史の身躰は健康なりしと雖も餘りに多く用ゐ過ぎたり千八百八十九年の如きは友の勸めに從ひ一年間休息する事となりしも、猶全く務を棄つる能はす只僅かに務を變へしのみなりき、此の年は即ち諸方に漫遊し禁酒事業を執らんとするものゝ教導に力を盡せり、此の間編輯の務をエミス孃に委ねしか、孃の編輯は宜しきに適ひ少しも差支ふる事なかりしのみか女史は一年の後所感を記して當時の紙面は己か筆を執りし時よりも備はりきと言へり、斯く女史は一時も事を爲さすして居る事能はさるの人なりき。

われと女史との關係は頗る親密にして、常に姉妹の如く交はりき尤と好くわか家族を訪ふものは女史にして、女史は又わか母の親しき友なりき、われ等は屢々安息日の朝女史と母とを家に殘して教會に行き、歸て二人か樂しげに語らうを見し事ありしか、今日は二人か共に天國に旅立ち行てありとは夢にも思さりし事なりき、母は一部の書を記念として女史に送り此の世を去り給ひしか、女史は夫れに付き思ふ所を述へ猶日本支那等に行きての後の事なと書き遺せしか、ア、其の書

面を送りしを最後として今は此の世に亡き人の數に入りし事の悲さよ。

女史は人を識るの才ありき、ジユリア、エミス孃に不在中の編輯を依賴せしは女史なり、マーガレツト、サツドス孃を編輯員に入れしも女史なり、アリス、ブリフグス孃を書記に適せる人なりとてわれに紹介せしも女史なり。

若し婦人矯風會の今日あるに至りし所以を精密に調べしならば、一として女史の盡力を被らざりしものはなかるべし、われは屢々女史に指揮を乞ひし事あり、幸にして女史とわれとの間には一度も意見を異にする事はなかりき。殊に最後の書面にて禁酒事業に從事するものを修錬するに完全なる學校を設くるの議を矯風會の年會に提出する樣云ひ來れり、われも双手を擧げて此の議を贊成せり、本年六月の世界矯風會員會議には此の問題其の主要なるものとならんと待ち搆へ居たりしに其の提出者を失ひしは是非もなき事と云はんか。

千八百九十一年の十二月に女史が尤も親しき友ジユリア、エミス孃は永き眠に就きぬ、女史の悲歎は察するに餘りありきわれも亦た言ふべからざる悲を感じ今日も猶其の悲を免れざれども、女史は編輯の務ありしかば直ちに其の悲を棄てゝ之に從事しけり、後三週間にして出版協會のものがシカゴよりカリフオルニアに旅行せんとする事ありしが女史は同地方に親愛なる姪ありて其の人に遇はんが爲め協會の人と共に行かん事を切望せしも、編輯の務ありしかば如何ともする能はざりき、然るに雜誌社の役員は大に其の意を贊し金を出して費用を助け、加ふるにソマーセツト女史とわれとが編輯を受持つ事となりしかば、女史は喜びて行く事に決しぬ、出立の前に女史とソマセツト女史とわれと三人相會して祈禱せし時の樣は今も忘られぬ程なり、殊に女史は涙を流し聲を擧げて熱心なる祈禱を捧げたり。

斯て女史は東方の諸州を巡回し後ち終に外國に出立する事を定め千八百九十二年八月三十一日ペンクーペより先づ日本に至りぬ、女史が日本に至りしより其の臨終に至るまで十一週間此間女史の爲せし處の事實に少々にあらざるなり、日本に至りし婦人にして女史の如き優待を受けし人殆んど他にあらざるべし、魯西亞の皇太子の此の國に來りし時、市民の歡迎の盛なりしと聞きしが、女史の迎られしは之に比べんか、思

ふに道德界に於て女史の如き大なる戰を爲したる人は決して多からざるなり、今や女史は其の務を終へ其の敎訓を與へし夫人の家にて永き眠に就きぬ、其の肉は冷かなるも其の靈は勝ちて神の傍にあるべし。

竹の雪折

花圃

幼き時、いたう老たりと見し人の、今もなほ其儘にあるが、うれしきものゝいぶかしく、生先こもる若竹の千代も八千代もとおもひたのめしが、大方のよに抜いでん一ふしを心なき雪折に若竹ながら葉分の露と消ゆるもはたいぶかしき心地す我友七年ヨ前に嫁ぎて三人の子持ちぬ、こぞの夏頃は文子となづけし女子の六ツなるを先にたて、四なる武てふ次の男子の手をひき、末なるを抱きてしば〳〵我宿をとひぬ、文とは文の道に、武とは武の道にくはしからんを祈りての名なりと母なる人のかたるを聞に、うべこそ女子は優にやさしう母の其方の才をうけたらんやうに見え、男子はまわらぬ舌にいふこともおのづから雄々しくたけく父君はいかにし玉ふぞと問へば、いたう似かよへるかたちを正しふくよかなる頬のあたり鬚かいなづるさまして見するも、愛らし、ましてそを見る母の心いかならんとそゞろ涙さへぞ落る、この子の愛らしきに引かれてわが方よりも折々は訪ひき、この男子のいまだ懐にありし頃、母なる人ある歌のむしろ、半にて歸らんとするをとゞめしに、子なき人の心もなき事をのたまふよ、乳の張りしにも、かなし子がいかにまつらんと思ひ遣らるゝをといひし事ありしが、このかなし子よ、いたうあらし吹すさぶ朝に世に生れ、はつかの年月にて又つねなき風にさそはれんとはおもひもかけざりけん、われも、いつもすくよかなるものとのみたのめて、ことしはとく行て一つ年ませしさまも見たしとたのしみしに、一日の夕從弟女とひきて、人の老少不定はいはんも今更なれど、殊におどろかれしはけふ武君の死去せられぬ由、母君のつげ玉ひしなり、此の母なる人の雄々しき心掟に、さのみ涙も見せられねば僞かとはじめはまどひぬといふ、聞われも、又おどろきて、そはまことかと問かへし、そなたに向けし顏を、我掩ふ時、かれの袂も濡れたりき、涙の

ひまに從弟女は、うち歎じてかゝるかなしびをおもへばわがごとく子なきも、よかんめれといふ、之もあはれにかれもあはれなり。この月廿六日は師の發會にて歌の席開き給ひしに年ごとにさだめとして來つるかの友はかげもなし、あゝ、わが子うしなひては何事もおもしろからぬにやと其事のみ思ひうかぶに、いつもこの席に逢見る老人は男も女もすくよかにて、ことしは八十の賀ものせんなどといひ合、これらのさだめなき事目の前に見る心地して何となく沈み勝なる我心にくらべても、かの母なる人は尙ほ、咲出べき花もいかに見らん、夜毎の月もいとゞ朧に見えわかでやあらん、人は百よろこび聞く鶯も、經よみ鳥とうたてものうくおもふらんと萬につけて人の親の心の闇をたどりおもひやりぬ。

家政

○馬鈴薯は移住者を起す

畜耡子

近頃郡司大尉が千島に移住せられんとするに、世上は擧げて其の壯圖を稱讃せり、吾人も亦此擧を讃美するに躊躇せず、蓋し斯る企圖は、單に勇なり壯なるが故にのみ稱し讃すべからず、吾人は細心して更に他に稱讃すべきもののあるを知る。そは大尉等が輕舸に駕し遠程を航海せらるゝ一時の勇にあらずして、彼等が千島上陸の后無事太平の日に當り日常粗食に飽かず、荒屋粗衣に安すんずる大尉等は、發途前の大尉等に優る幾倍の大勇ぞや。凡そ開植の事の敗るゝは其因する所ろ一に此の勇なきにあり。

我國民は久しく祖先墳墓の地に安んじ、米食に馴れ、甘んじて狹屋に群居す、我民族の足跡を外に刻する者に至りては甚だ稀なり。吾人の遺憾久し、偶々一潮水を隔てたる、我南圖の小笠原の一小群島に到りて、內地移住者が狀態を親しく視察すれば、吾人をして甚だ賴母敷からざる感想を懷かしむ。彼等は故鄕盛花の季候を羨やみ、米食の佳味を忘るゝと能はずして、二千の移住民十中の八九は內地より輸入を仰ぎて米食す、然し彼等は移住者と云ふべからず、眞の移住者は先づ第一に必要なる食料を其風土に產したるものを採らざるべからず、移住者の常食は、馬鈴薯、玉蜀黍、燕麥の三種なりとす、此種類寒暖何地に於ても產せざる所なし。

此頃郡司大尉が移住の主意書を閱するに、吾人に一層の痛快

なる感を與へたり、彼等は一粒の米をも内地に仰ぐの志なく、總て衣食は其土地に生じたるものを以てするにあり、然れば千島は勿論米熟の土地にあらねば、必らずや薯、黍、麥の三種を措て他に食物を得可らず、大尉が事業の成敗は實に瑣々たる此邊に懸りて存すると、先移住實驗家の鑑定なりとす。

○馬鈴薯を常食に用ゆる調理法

英米農家にて馬鈴薯を常食に用ゆる簡便なる調理法を聞くに薯の新鮮なるものを洗ひ、一度ザーット淪き、少しく冷えたる頃を待ち、皮を剝ぎ取りて后ち、磨鉢又は適宜の器に入れて、棒にて程よく潰し置き、鍋に牛豚などの脂肪をぬりて后ち、馬鈴薯を鍋に遷し、砂糖、食鹽を適當に加へて、暫時炙るべし、之に牛豚鷄肉の細片の淪きたるもの、或は鷄卵を混入すれば更に風味よし、總て薯類には脂肪を加ふれば非常に其味を增すものなり、之を調理するに注意すべきはつとめて粘着せしめざる樣、手心、火加減の程よきにあり。此食料は、牛豚肉を加へざるも、脂肪の助けあれば、農家の常食として充分なる滋養なりと云ふ。

田家のこよみ

○清明四月四日○玄鳥至○鴻鴈北○虹始見

○三月廿六日より四月十日迄農事手當

○播種　棕櫚、橡、榛、罌子桐、鳶尾、苜蓿、零陵香、羊蹄、龍葵、山豆根、黃耆、茴香、黃芩、芸香、防風、附子、桔梗、茜根、望江南、檀特花、冬葵、藍菊、紅紗花、紫蘇、莧藜、秋豌豆、貍豆、甘露兒、冬葱、灰菜、蔘蕪子、菾子、牛蒡、甘藍、春蕎麥、蓖麻子、西瓜、紫根、芡、三波、下子、葉蘿蔔、甜菜、落花生、荏胡麻、等四月下旬迄に播種してよし、

○移植　銀杏、石榴、松、槇、圓柏、落葉松、椚、楢、柏、紫荊、杜鵑花、百日紅、楊梅、枇杷、椎、櫧、梔子、櫪、樅、肉桂、榊、山茶、椿、冬青、百兩金、鳳尾竹、藿香、蒟蒻、薤、蹲芋、生姜、金豆、白芋、赤芋、紫芋、九面芋、馬鈴薯、薯蕷、佛掌、菊芋、蕃黃獨、柑橘類は四月下旬迄に移植すべし、

○挿木　柿、林檎、天師栗、牡丹、金櫻子、梅嫩、杉、楊梅、柑橘類、玉蘭、百日紅、石楠花、等挿してよし、

○楊梅、粗榧、山茶、躑躅、椿、柑橘類、は四月上旬迄に接穂してよし、

○此季節より漸く新萠芽の吹き出てんとすれば、寒氣烈しき夜、或は風和ぎ晴朗の夜は折々霜の降ることあれば、霜に弱き草木には怠らず霜除けを覆ひ置べし、霜除には乾きたる麥藁などよからん、

○園藝法

第八　移植法

實播したる苗木にして、三四年經たるものは之を堀りとり、風當りの强からぬ假植地に苗を斜に假植して、其年の秋若くは翌年に植え換るを可とす、又果木をして花芽の多く生ぜしめんとするには、秋季の終りに果木他に移植すれば、其勢力を減じて翌年に至りて許多の花芽を生ぜしむるに大に利益あり、此法を行ふに當りては成べく根を損傷せざる樣注意すべし。

通信

淡濱子編

●高知縣通信

◎不正營業者　江の口警察署一月末の調査によれば娼妓八十三人貸坐敷二十一娼妓九十一人なりき、

◎囚徒及刑事被告人　高知監獄在監人員一千二百〇九人内女四九十五人刑事被告人百五十八人中女十四人なりきは二月末の調なり、

◎女生徒募集　高知師範學校にては女子部生徒の補欠を募集する趣なるが其入學試驗は來る四月四日頃より始むるよし、

◎新地の遊客　二月中の調査によれば一千二百三十一名なりきは慘爽、

◎嬰兒壓死　本縣にては嬰兒壓死罪を犯す者多しときく何さか當路者矯風家の盡力を煩はしたき者なり、

●福井通信

◎工女の美談　福井市佐佳枝下町の、大和ヒサさ云へる羽二重織りの工女は、去る明治十九年頃より竹內常七さ云へるに雇れ、先づ一基の機具を以て機業を創め孜々怠らざるのみならず、其織り上げたる羽二重は他に比して巧緻なるゆへ他に比して常に、十二三割高價に賣れけるが、ヒサは雇主を助けて事業を擴張し幾多の工女を養成し、今は竹內も三十餘臺の機具を有する立派の機業家さなりしが、竹內の喜ぶ事大方ならず、及ぶ限りはヒサを優遇すれども、ヒサは辭退して之に當らず、妾は他家に雇れて其雇家を興すは何よりの樂みなりさ、昨年佐佳枝下町の平野佐兵衛に雇れ見習工女に敎授しつゝ一臺の機具より創めて、今は六七臺に及びけるが尙益す勉强して天晴れの機業家になさんさ日夜盡力し居れるさ云ふ。

◎高等女學校の入學生　本縣立高等女學校にては、今度第一年生三十五名。第二年生十名募集す、尤も其募集生を各郡市に配當し、其住居者より撰拔す其各郡市の配當は左の如し

足羽郡	一人	吉田郡	一人	坂井郡	六人	大野郡	六人
今立郡	四人	丹生郡	二人	南條郡	三人	敦賀郡	四人
三方郡	一人	遠敷郡	四人	大飯郡	一人	福井市	十二人

◎入學試驗科目程度　右高等女學校の入學試驗科目程度は左の如し

第一年級へ入學の分

讀書	漢字交り文	作文	書牘文	習字	楷書
歷史	日本歷史の大要	地理	日本地理の大要	算術	分數迄

第二年へ級入學の分

高等女學校第一年級の學科程度に依る

●山城通信

◎婦人慈善會　淀に於ける婦人會員、横山みん子、外數名の發起にて、婦人慈善會を起され、當時會員二十有餘名ありて是が動機なるべきはクリスチャンの婦人にして、未信者も會員に加はり追々盛況に趣く由なり、最に同地の火災のありたる爲め其被害者を救恤なさんさて義捐を募りて、之を送られたる由。

●宮城縣通信

◎慈善音樂會　同會は毎年春秋の二季の二期開會せられけるが、本年は來る廿日春季皇靈祭に相當するを以て、同日仙臺東四番町仙臺座に開會せらるさ云ふ。

◎宮城女學校々長の交迭　同校々長プールボ、及びヒエレマの兩氏は滿期にて歸國せらるゝ由なるが、解纜の期は四月頃なりさ、其後任者は、未だ決定せざる由。

◎產婆　當市長町駒井やす子(廿一)上染堀町丹野きん子(廿二)の二名は今回內務省より產婆開業の免狀を下附せられたり。

◎孝女　當市北二番町馬場佐一郎の長女つき子(十七)は天性至孝六歲にして實母に晚れし故、繼母の手にて育てられしが、父佐一郎は廿年前より、其郡役場に奉職し家に歸るとも稀なれば、此間非常の辛酸艱苦を嘗めしも、繼母に仕ふるに孝養一日も懈るとなく常に溫顏を以て接し忠實に働き居る樣を見て近隣の者皆感じあえりさ云ふ。

◎宮城縣病院產婆講習所卒業生　同講習所にては、來る三月中十六名の卒業生を出すさ云ふ。

◎卵巢腫瘍の手術　宮城縣病院にては、同院長山形仲藝氏及び婦人科長田學次郎氏の執刀者にて、入院同患者なる、福島縣の藤川もよ(三十)の腹部を切斷の手術を施されしが、甚だ好成績にして頗る健全に赴きしさ云ふ、因に記す同院にて斯る手術は今回にて三回なり。

◎貧民救濟　メソジスト敎會のヘルプル女史及び山田梅子は過日來貧民救濟に盡力せられしが、今回東北學院の高橋傳五郎、木村清松の兩氏等さ協同し、更に貧民學校を設立して貧民の子弟の敎育に從事せらるゝさ云ふ。

●神戸通信

◎松蔭女學校　同校は多年敎育に經驗ある、清水氏主幹さなり、敎員は何れも熱心精勵せられ、從て校部內も矯められて、其內部は全く日本人の手に屬したれば、外國人は直接に關係なき由なり。

●福井縣通信

◎高等女子師範學校入學試驗　過日當縣廳內に於て同校入學試驗を執行せられたるに、福井市の橋本やす子(高等女學校卒業生)は合格になり、來る廿五日迄に上京せらるゝ筈なり。

◎師範學校女子部　當縣立同校女子部は其筋の許可を得て、當分の內設置せざる旨、縣知事より告示せり。

女報

淡海子編

●ウエスト孃紀念噴泉建設　萬國禁酒會遊說の爲め、日本に渡來し金澤に於て永眠したる、エッスト孃の爲め、米國シカゴ府禁酒院門前に紀念飲用噴水建設の擧ある由にて、日米兩國有志者の義捐募集方を萬國禁酒會長より、米國公使館ホイトニー氏へ依賴し來りたるに就ては、其義捐は一人五錢以下とし、京橋西紺屋町禁酒同盟會に於て募集し、可成多人數より募る筈なりと云ふ、右禁酒會長より米國公使館に送りたる書狀の略は左の如し、

儲て日本帝國人民には非常の懇切を以て、ウエスト孃を待遇せられ候趣實に感佩の至りに不堪候、孃か最終の葬儀は其故鄉なる、イリノ井ガアレスボルク市に於て、一月十六日月曜日を以て擧行相成候、而して當日會堂には日本及米國の國旗と花とを飾り哀悼の意味を深ふし、兩國の親密なる交誼を表明致候東京婦人矯風會に於て調製致されたる美麗なる棺覆と、米國の國旗を演壇の兩端に飾り、又橫濱禁酒會より送られたる花星とユニオンシゲなる社員一同より呈せる花環とを相對し其他花木を以て麗敷堂内を飾りたる者數多有之、就中日本より送られたる右の棺覆ほど人々に感動を與へたるものは無之と確信仕候云々、遺骸は手厚き注意を以て亞鉛函より取出し、美麗なる金屬製の棺に移し、且つ葬式掛員より私へ開らるゝには防腐手當行屆き居るため遺骸完全に有之ウ孃兄弟の一人外に親族一人及舊友一名のみ接見相成りたるに、其容姿確となりたる趣に候尤一般の人々には見せ不申候得共、委細は不日刊行のユニオンシゲナルに掲載可相成候に付、右出版の上は貴舘へ多分に差上可申候間、何卒諸名へ御配分被下度候云々。

●女子渡航の見合せ　茶業組合より閣龍大博覽會へ喫茶店を出店するに就ては、接伴人として女子數名を渡航せしめんとて、臨時博覽會事務局へ出願し許可ありしも何分經費の許さゞる處より遂に女子の渡航は見合せとなりしといふ。

●全國婦人會の同盟　全國婦人會が同盟の風說ありしが、去月十八日發行の、東京婦人矯風會雜誌の報する所によれば、米國には米國を代表する婦人矯風會あり、英國には英國全躰の婦人會あり、今東京婦人矯風會あり、各地方には地方の矯風會あれ共、日本全國の婦人の集會とては未だ起らざる也。故に我等は日本全國婦人同盟を組爲すべしと曾て論じたりしが、此頃、東京婦人矯風會中の有志者、相會して日本全國の婦人會を組織するの相談を爲されたりと云ふ。是れ誠に必要の事と云ふべし、希はくば各地方の婦人會、矯風會も皆此の趣意を贊成せられんことを、其の規則の如きに至りては、追つて報道もし、批評もすることあるべし。

●女子死罪犯者統計　最近の統計學雜誌の報ずる所によれば、明治廿三年中に、死罪犯者は四百十九人にして、内女子八十五人なり、之を細別すれば。人を謀殺せし女子、五十七人、此内文字を知る者八人、文字を知らさる者四十九人なり、强盜をなし人を殺せし女子一人にして、此者は文字を知らさりき、火を放ちて人の住居したる家屋を燒燬せし女子二拾七人にして、此内二人は文字を知るも、殘り二拾五人は文字を知らさりき。

●女子重罪犯統計　近刊の統計學誌の揭ぐる所によれば、明治廿三年中の重罪犯者は、三千四百五十六人にして、此内女子は三百〇八人なりき。今之を細別すれば、農業に百卅九人、工業に廿九人、商業に十二人、衞生に關する業に四人、資本の益に生活する業に一人、雜業に廿一人、力役者廿八人、婢に十五人、職業不知に一人、無職業に五十八人なりき。

●布哇女皇の再使節　布哇女皇が元司法大臣ニューマン氏を使節として、米國に差遣したるよしは前號の紙上に記せしが、頃日在ホノルヽ藤井領事より或る人の許に達したる信書の一端に據るに、女皇は尙ほ能く革命の顚末を米政府に陳述せしめん爲め、二月一日更にプリンス、デーヴ井ツト、カワウアンシウ親王（親王は故カラカワ帝の甥にして女皇の從弟なり）始め舊總理大臣マツカフアーレン、及びイー、ビー、プツレュの兩氏を華盛頓府に差遣したりとあり。

●女軍兒鹿島縣知事邸を圍む　去る二日夜數百名の婦人集つて、大迫鹿兒島縣知事邸に亂入し、戶を破り石を投げ有るまじき亂暴を振舞ひたり、跡にて其故を聞けば此れは、當夜同知事の令息同邸に於て結婚ありたる爲めなり、此の事同地の習慣なりとか（二件日日）

●モリス夫人　去る三日歸國の筈なりし同夫人は病氣のため乘船なり難きを以て今に橫濱グランド、ホテルに滯在し、一切來客を謝絕し專ら療養中なり多分本月三十日出帆のチヤイナ號にて布哇を經て歸途に上らるべしと云ふ、因に曰ふ是迄帝國ホテルに於て催されたる婦人談話會は、同夫人歸國後も引續き同所に於て、每月二回開會し慈善宗教上の談話を聽くことに決せりと（基督教新聞）

●福島縣學事　師範學校を卒業せし女子十七人中二名は、女子高等師範學校へ入學し、一名は病死したれば、目下縣下小學校に奉職しある女教師は十四人なり。

●福井縣學事　師範學校女子部は其の筋の許可を得て、當分の內設置せざる旨、此の程縣知事より告示せり。

●辻新次　高等女子師範學校長に任ぜられたり、

●福島中佐の家庭　遠征將軍福島氏は、常に家に在ること少く、支那に遊び、朝鮮に行き、米國に使し、獨乙に遣らる、其の夫人の同家に嫁せしは、明治七年にて、かく中佐が常に家に在らざるため、其の兒女は、全く夫人一人の手にて鞠育せしものと云ふべく、今や長兒十三歲に達し、父の膝下に戲れて、慈顏に無心の稚笑を漏せしは、僅かに二年間のみなりしと、以て夫人家が家庭に於ける教育の如何を推知すべし。（四件新教育）

●妖婦の禁役　佛國代議院は、諸製造場に於ける工婦中、其產前一個月及產後一個月の間は、之が使役を禁ずる法案を可決したり。該法に據れば、此二個月の間は賃銭の半額を給與し、其一半は政府より、一半は州廳より下付するよし。（官報抄）

●宇都宮の貸坐敷移轉問題　宇都宮に於ける貸坐敷指定坐地拂下の方法に就ては同町民の苦慮一方ならざりしが、今度同町會にて調査委員五名を擧げ實地に就て調査の上不日其結果を報告することに決定せし由、同問題は同町に取りて重大なる關係を有するものなりと云ふ。

●ピヤソン女史　去月廿五日横濱二百十二番の共立女學校よりピヤソン氏の一行傳道の爲め赴かれ說教會を開き同氏を始め木脇、清水、岩村、小林の諸女史交々說教せらる、會衆殆んど百名に近し、翌日日曜日の朝は、清水、岩村二氏の司會にて集會を開き、全夜は又たピヤソン氏外六名の說教あり、會衆凡そ五十名計夫より清水、岩村の二氏は數日同地に滯在して働かれたり、依て大に地方人民の心を動かし將來の希望頗る多し（キリスト新聞）

●テニソン夫人　去る頃英國の皇室にて女皇が多くの、御親戚を招き給ふて遊び給へる折に、已の爲らんと欲する人を札に書きて示めす一種の遊を爲し給へり、人々、女皇は已に帝位にましませば、何を望み給ふべきかと、皆々女皇の札に注目せしに『余はテニソン詩聖とならんことを望む』とありしかば、人々女皇の心がけの優美なるに感服すると共に、詩聖は國帝の位もて、買ひ得ぬ尊とき所あるを羨みしとなん。此女皇にすら羨まるゝ詩聖テニソンを夫とするの幸を得たるは、左に示めすテニソン夫人なり、夫人は清淑、貞潔、深く歌詩を愛し、詩聖の家を樂くして、詩聖を助くるもの數十年なりしが、今やテニソン氏去つて寡婦の身となり給へり。夫人の像は從來多く新聞紙に上らざりき。ソハ極めて內氣にして、華々しく外に出ざるが爲也。夫人名はエミリー、セルウードと云ふ。

●婦人の學位　近年婦人にして學位を得るもの多きが、此頃また濠州メルボルン大學に於て、二人の婦人に、各々バチロルチフアーツの學位を與へたり、而して二人の婦人とともに、ユダヤ人也。一人はエリス孃、一人はローゼンハム孃と云ふ

●無冠の女王　過る頃、萬國矯風會頭ウヰラルド女史は、英國に於ける同志に招待せられてロンドンなるイゼクトルてう公會堂に臨席して演說せしが、イエストノル城の持主にして、英國矯風會の會頭なるソマルセツト侯爵夫人、其右に立ち、婦人自由同盟の實行官たるカアリツスル伯爵夫人其左に立ち、名たる名婦人に接せられ、數萬の群集に周繞せられ最とも熱心な風采にて、知惠ある高尙なる矯風主義を述べたる時は、其風采、云はんかたなく天地も轟くばかりの喝采にして、萬事此の事には冷淡なるタイムス新聞すらも非常に賞讃し、パルマルバツチツトの記者たるステツド氏は遂にウヰラルド女史を稱して、無冠の女王と呼べりと云ふ（三件婦人矯風）

●久留米市の置娼建議決定す　數年來筑後久留米市の一問題となりたる、置娼論は遂に建議と化して久留米市會に出現し、同市會は既に數日間の議事に涉りしが、遂に昨六日を以て之を可決するに至りたり、尤も此建議者は瀨ノ下町の有志者なれば、置娼の場所は瀨ノ下町にせんとの說ありしかど、同市會にては其の場所を限らず單に久留米市に之を置くことに可決したり、（福陵）

●八十五歲の老媼手織の絹を上る　長野縣小縣郡上田町字常磐城なる、中澤文藏氏の曾祖母しの子は、文化六年正月の生にて今年八十五歲の高齡なるが、壯者も及ばざる程の壯健にて、先年憲法發布の際養老金の恩賜に預りたる聖恩の忝きに感じ、此の大御惠に報ひ奉らんと、去年の秋製糸より織上まで更に他手を借らず、最と精巧に白絹一疋を織出し、同年十一月獻納の義を宮內省に出願せしに、其筋にてはしの子が赤誠の程を聞屆られ且は高齡者手織の故を以て、特に聽許せられたれば、しの子は初め一家の悅び一方ならず、去月十七日郡役所へ奉呈方を依賴したりと、しの子一老女子の身を以て　天恩を忘れざる此の如し、赤誠の感ずる所九重を動かすに至る亦宜なる哉（婦人與風雜誌）

●婦人に對する社會の保護　民友子此頃婦人に對する社會の保護と題し論じて曰く。乳兒を懷くの婦人にして荷車を推すあり、稚兒を泣するの婦人にして荷車を輓くあり、吾人は曾て婦人の男裝して人力車を輓くものあるを見たり吾人は又十五六歲の女兒車を輓くを見たり、然れども今や人力車を輓くの婦大小兒少しと雖も、荷車を推輓するの婦人に至りては、往々にして之を大道に見る、婦人の躰質は、男子に比して頗る脆弱也、推輓は男子と雖も、難とする所なるに、婦人之を業とするが如きは、豈に同胞として見るに忍びんや。此の如き職業を執るは、貧困已むを得ざるに出るものと雖も亦其夫たるもの兄たる者の殘忍なる、其妻、其妹を強て之に從事せしむるに由るもの多しとなす。國家にして、之を傍觀す、是れ殘酷不仁を默許する也。吾人は社會が婦人を保護する一層厚を加へんとを切望す。

●新潟縣婦人矯風會設立　日本メスヂスト派の、高田教會にては二三令孃の企圖にて、婦人矯風會を設立せり、その主意はクリスト教の擴張に起因する如くなるも、又た專ら婦女子に必要なる家政談、育兒法、看病法等につき講話するよしにて、既にその講師をも定め、去十九日の日曜日に午後一時より、同會場に於て開會せしと云ふ、

●高岡縣屬女學校に臨む　宮城縣學務係屬高岡松朗氏は、去三日午前十時より仙臺東三番町なる、宮城女學校に臨み教室其他を參觀の上同十二時歸廳せりと云ふ

●日本弘道會　婦人部通俗講談會は去十二日午後より四ッ谷愛住町愛住女學校にて開會せられたりといふ、會長西村茂樹、幹事樋田曾一、會員三輪田まさ子

●靜岡廢娼會起る　靜岡縣靜岡市基督教信者其他の有志は、淫風掃淸の目的にて、廢娼會を結び目下會員募集中なりと云ふ。

●娼妓の一大石碑　神奈川町の貸坐敷の甲乙等は、娼妓の爲一大石碑を造り樂隊を雇ひ其興を助けんと近來の怪事世の風潮想ふべし。

●社交上に於ける婦人の責任　と題し去る二日の朝野新聞に掲けて曰く。我國婦人の地位は文明東漸と共に次第に進歩し、進歩しつゝある也地位漸く高し其社交上に於ける責任亦た隨て大ならざるを得ず、我が同胞姉妹を代表する高貴の婦人は果して此責任を盡しつゝある乎、彼等の鋭意して企てつゝある慈善的事業は、舊日本の婦人が夢にも見ろに及ばざりし程度に達せんとする也、然れども慈善的事業を以て公共を益し細民貧苦の萬々一を救濟す是れ未だ其社交上の重き責任を盡したる者となす可らず、我が同胞姉妹の代表者が盡すべき責任とは何ぞや、我が國民が常に養成するを要する活潑勇武進むを知りて退くを知らざる企業心を奬勵振興するの一事是なり、今や福島中佐は西伯利亞の遠征を終り日出度く歸朝せんとし、朝野の人之れを歡迎するの準備をなすに忙しく、郡司大尉は千島探險の爲め將に北海に向はんとし帝室を初めとし奉り有志の徒資を捐て財を發し此壯圖を助くるに熱中す、獨り我が同胞姉妹の代表者は福島夫人內助の功あるを賞する爲め多少の事を爲さんと企つるのみ、未だ其社交上の責任を全くする者と見做す可らず余輩甚だ婦人の爲めに遺憾に堪ざる也

●ウエスト女史演說度數　ウエスト女史の日本に滯留は、僅かに三ヶ月にして、其演說度數は左の如くなりし、

東北	三十回	一万一千三百六十人	横濱	十二回	二千二百三十人
東京	卅九回	一万二千四百四十人	關西	廿六回	一万四千人
合計	九十七回	四万卅人			

●全國婦人會同盟の相談會　全國中の婦人會を聯合して、日本全國の代表たるべき婦人會を起さんとて、矯風會中の有志家は二月四日、麻布本村なる津田はつ子氏の許に集りて、彼是と相談せしが、先づ本部を設置せんとて、左の人々を委員に定められたりと云ふ。

矢島かぢ子氏、津田梅子氏、潮田千勢氏、佐々木豐壽氏、竹越竹代氏

●仙臺市遊廓問題　同遊廓は元と國分町に散在したるを、明治九年更に一廓を撰定し移轉すべき嚴達により、廢藩後荒れ果てたる片平町の一隅を開拓し巨萬の經費を懸け、常盤町なる一遊廓を開設せしが、同町は廣瀨川を隔てゝ、第二師團の兵營と相對し風紀に關する少からざるを以て、前知事松平氏は明治廿五年七月限り同町に於て營業を禁止する旨發令せしに、其後各樓主の請願により、本年七月まで延期となりしも追々期日も切迫し近來不景氣打續くの上、七月まで移轉せざれば營業禁止せらるべく、今や同町移轉は同市の一問題となり、此頃各樓主は集會を開き委員を撰擧し、一切の事を委托して臨時處理せしむる筈なりと聞く（國民）

●廢人の至孝　往昔より世に聞えたる孝子は多けれども、不具の廢人にして至孝なるは稀なり、今福島縣の通信中に磐城國宇多郡中村町字新町卅五番地に、菊地丈三郎といへる啞者の孝子こそあらはれたれ、丈三郎の父は同人が三歲なりし折西南戰爭に出張なし、熊本城下にて陣沒せしかど、母は男優りの氣性にてありければ夫を勵まし出陣せしめし后は、かくあると元より期する所なりとて、更らに淚くづをれたる狀を示さず、丈三郎を夫の形見と思ひ女の片腕に賃仕事など受負ひて、僅に其日を送りけり、春去り秋來り日月夢の如くに過ぎ、丈三郎八歲になりし折同所の神官田代方へ吳々も教育を囑みて通學させけるに、丈三郎も母の心を心とし如何なる風雨の日と雖休學せしことなく、學力日に上達しぬ十七歲の頃より師門を退き、朝は夙に起き田畑を耕やし四五反あまりあるも一人にて働きかへし怠ることなければ、秋穫他に優るを樂み農後は必深夜まで讀書をなし、傍ら母を慰め孝養怠ることなきにぞ、知るも知らぬもみな其志に感じけり、さるに丈三郎は客年十一月頃より農事の暇をみて煙草刻人となり、其手間を日々郵便局貯金となし本年三月には、父の墓參として熊本へ赴かんと日々勉勵しおれり、此由を聞きて中村町小學生徒一同より賞與として數箇の書籍を寄送したる由（教育新聞）

●死を以て夫を諫む　古の貞婦烈女にも倍して夫の亂行を死諫せし美譚は、愛媛縣喜多郡喜多村大字五郎の產にて、當時仝郡菅田村大字菅田に寄留する、唐戶久次郎の妻、お里（二十二）なり夫久次郎は天性非常に酒を嗜み、少しも稼業に身を入れず朝夕の別ちなく飲みては醉ひ、醉ふては眠り、他所に出ては亂行猥雜の不身持に、お里の悲み一方ならず如何にもして禁酒させんと思ひ、淚ながらに諫むると幾度なるか知らざれど、思慮の狂ひし夫の耳には無益と聞えて取合はず、益々募る不仕だらに此上は死を以て諫むるより外は無しと、去る十二日樒の葉に甘草と黑砂糖とを調合し煎じ詰めて服用し、悶へ苦み死に瀕するの處を、久次郎の認むる所となり種々治療に手を盡したれは、先づ一命だけ取止し由なるか、其心根を知りし、久次郎は流石に面目なしと思ひてか、其後は深く身を愼み只管稼業を勵み居るよし、死なずとも他に道あるならんにと言ふものあるか知られど、日の本の民が忠孝節義のため命を鴻毛の輕きに比するは、建國以來の美風にて夫の亂行を幸ひに役者狂ひなどする、不貞の婁女は、お里を龜鑑に性根を改むるが善し、と因伯時報に見えたり、

●大日本婦人衞生會　にては去十一日午後一時より、麴町富士見町富士見倶樂部に於て第六次總集會を開き、總裁小松若宮御息所殿下にも御臨場あり醫學士、三島通良（稱痘談）醫學博士、佐々木政吉（病門の衞生）兩氏の演說あり、次に役員改撰を行ひたるが多數を以て、會長に子爵夫人、土方龜子副會長に、濱尾さく子幹事に、西きよ子、村岡久野子、中野悅子、馬渡玉子、加藤つね子、中村はる子、北澤のぶ子の七名當撰し、其他議員二十名の撰擧あり會員に茶菓等を饗し散會せしは午後五時なりき、

皇后陛下
明宮殿下御覽の書

（リツトルロードフオントルロイ）

再版 小公子

子供のよみ本 ✧ 若松しづ子譯



森田思軒居士の批評

余紛々たる世間の譯文に於て平生甚だ許可少なし獨り若松賤子の「小公子」に驚嘆す今「罪と罰」を得て又之を二にせむとす二書が皆な其文を俗話躰に取りしは極て習なり苟も俗話を以て文となせば其詞を採り其の方式を求むるの悉くして且つ便なる車夫厨婢の偶語も直ちに我が文の資とならざる無し若し專ら雅言を用ひば「小公子」のフォントルロイが始て老侯爵に謁する處本書の醉漢が醉言する處の如き余は恐る縱ひ賤子不知庵が如意の筆を以てするも寫して今の文の半ばにも至るを得ること能はざるを余は是に於て益々世間の譯者の弱處が其詞に貧なるの一事に根する者多きを知る。

實價金貳拾八錢
郵税金八錢

發行所 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

取次所 東京◉東海堂、巖々堂、東京堂、武藏屋、警醒社、京都◉便利堂、東枝律、大坂◉岡島、梅原、神戶◉福音社、熊本◉草野、函館◉福音舍

故近藤賢三君 高橋要亮君同著

增訂三版 經濟秘法 **廢物利用** 上下合本

正價金三十五錢 郵税金四錢

目次

魚類の廢物より石鹼を製する事
藻を以て紙を製する事
魚類にて紙を製する事
鯨の上肉より蠟を採る事
海草より砂糖を採製する事
牛馬家の血液より大利を得る事
馬肉を食用にすべき事
牛の毛用ひ方種々ある事
松樹よりテレビン油を採製する事
松の木にて綿又は布を造る事
茗荷にて糸を製する新法の事
蒲草より綿を採る事
桑の皮より綿を採る事
玉蜀黍の莖より糖蜜を製する事
松葉を布團綿を製する事
甘藷は用ひ方にて大利を得へき事
石決明、タガヒ等の介殼を鈕釦となす事
澁柹を用て砂糖を製する事
石を煮て和らかにて器物を造る事
青竹を煑て白色にする事
角を煑て糊餅の如くに之を器に作る事
玉蜀黍の莖をコルクに代用する事
櫚實にて食物を製する事
食物を新鮮の儘にて貯へ置く事
牛肉鳥肉を柔軟に煮る事

其他百六拾一件

發賣 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

女學雜誌第三百四十號（明治廿五年三月十五日遞信省認可）明治廿六年三月十八日發兌

當社又東京麻布區霞町廿一番へ移轉す

東京赤坂區仲之町二番地三號より

但爲替振出局は從前通芝口郵便局の事

注文通信共當所へ御遣し被下度候

東京麻布區霞町二十一番地　護教社

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價廣告料及無料廣告

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵税金五厘		

一行　一回（廿七字詰）前金　拾錢

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增と定む。

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

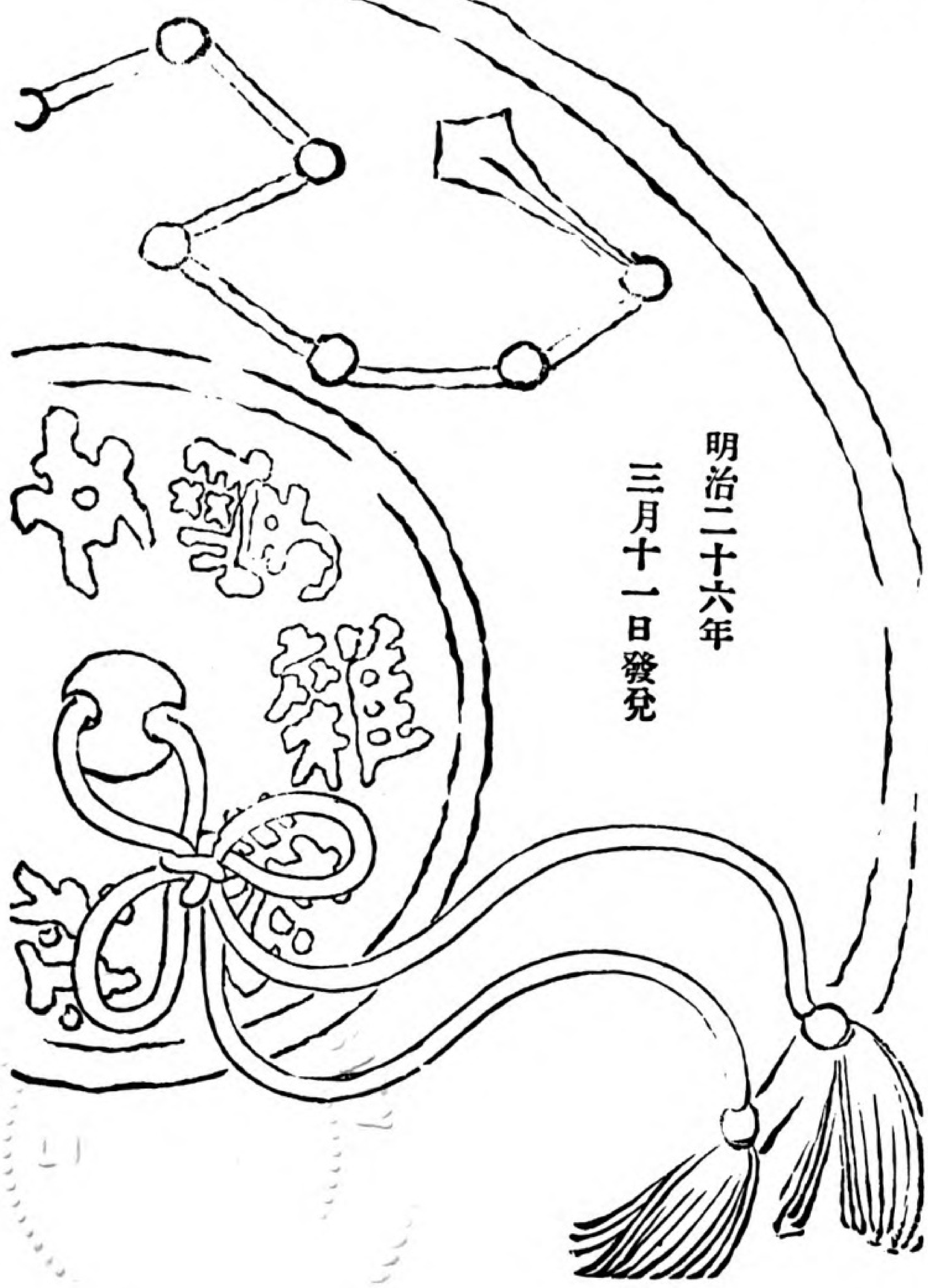
編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

女學雜誌

第三百四拾號

甲の巻



明治二十六年三月十一日發兌

注意

○社說　政界將來の合縱連衡○遠征壯圖○慨世私言を讀む
○雜錄　新土佐日記(はしがき、新職命)○海石榴舍歌話第二(くすしの歌よみ)○信仰と愛(山月子)○ウヰルヘルム、テル(橋本嘯月)
○史傳　亞拍罕(完結)
○小說　蛇物語第二(花園女史)○ローレンス(若松しづ子)
○批評　基督信徒のなぐさめ○文明雜誌○依田百川自傳○千島拓植○ロード、テニソン○支那と一戰せざる可らず
○片々

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 340. MARCH 11th. 1893.

EDITORIAL:—Politics do not cover All that Concerns a Nation. The Signs of the Times. What is Reform? A New Phenomenon is the Christian Church. What Mr. Tetsujirō Inoue Writes about the Christianity in Japan.

NOVEL:—"Kuchinawa Monogatari." (Kwaho.)

MISCELLANEOUS:—A Cup of Tea at the Recruits Mountain Home. After Coming Home from Mr. Inoue's Funeral. Journal of a Mountain Home. Storm of the Coach.

BIOGRAPHY:—Abraham.

FRAGMENTS:—Germany's Military Law and Social Reform.

本號（第三百四拾號）目次

○社說　政界將來の合縱連衡○遠征壯圖○慨世私言を讀む

○雜錄　新土佐日記（はしがき、新職命）○海石樹舍歌話第二（くすしの歌よみ）○信仰と愛（山月子）ウヰルヘルム、テル（橋本嘯月）

○史傳　亞拍罕（完結）

○小說　蛇物語第二（花圃女史）○ローレンス（若松しづ子）

○批評　基督信徒のなぐさめ○文明雜誌○依田百川自傳○千島拓植○ロード、テニソン○支那と一戰せざる可らず

○片々

前週（第三百卅九號）白表

○社說　國事は政事○時勢論○改革の（教界新現象（我國…如斯（井上哲二郎氏）

○小說　蛇物語（花圃女史）

○雜錄　草庵の進茶（暗光庵主）○井上大人の野邊おくりのかへさによめる（殘花）○山庵雜記（透谷子）○沖の嵐（紫苑山人）

○史傳　アブラハム（土井久壽彥）

○摘要　獨逸國に於ける軍制並に社會政貝

○批評　武道秘訣合氣之術○詩篇若葉（透谷子）○文祿の役に於ける小西行長○潜庵先生○大磯海水浴場の恩人

○時事　名士政談錄（大隈伯、安部井盤根、犬養毅、白根專一、尾崎行雄、佐々友房、の諸氏）○植民協會○後藤昌直氏布哇行

○片々

前々週（第三百卅八號）赤表

○社說　歲費の十分一○家族の會話○海外渡航婦女取締條例

○史傳　小公子著者バーネット夫人の傳○バットラー氏夫妻（其廢娼運動）

○家政　家事小智數則（ふみ子）○田家のこよみ（畜鋤子）○今昔物語○針錢○結婚のゆびわ○ウエスト女史の筆の跡「新日本」

○兒籃　ひろひ兒（上）しづ子

○摘要　合衆國が拂ふ酒類の價幾千○女哲學者

○女報　數十件

○孤兒の友　愛岐震災自助會

在昔吾黨時務に慨する所あり微力を當世の用に獻ぐることを決し初めて女學雜誌を刊出せしより此の方既に九年を經たり。熟ら惟みれば日月流水に均しく春秋華と同もに消盡せり。此間屢ば世と相逆ひ幾度か困躓せりと雖ども而も尚ほ叙々として長成したる所以の者は偏へに世上に知己ある社内に同志の助力彌よ加わりたるとに因れり。於此乎吾黨は各人手を分ち彌よ深く各部を挽りて以て知己の覽に供す且つ初來長年の期望を達せんことを欲せり。先づ「女學生」を別置し近頃之を擴張して「文學界」となし次に白表赤表の二色に分ちて兩々相對せしめたる者は即はち此の故也。而して如今機到りぬ當に赤白をして分袖獨歩せしむべしとて輙はち茲に白表女學雜誌に別題を附し改めて「評論」と稱す。

白表女學雜誌改題

評論
隔週發兌

四月八日第一號發

「評論」の期する所は女學雜誌生來の所期と異なることなし但だ之をして彌よ專らに益々深からしむることを許す耳。故に其主義依然たれば更めて辨ずることを要せず其裝ひも亦俄然的變すべくもあらずとは云へ今後特に力を盡して新に一生面を開く所の者は、時務を談じ社會を觀ずるの事を一層廣くし深くし且審らかにする事、並に神學道話の欄を設けて脩養自省の道を明にする事、史論評傳を緻密にして人生の眞相を示し世事革新の要埋を一層細論する事、海外の思潮流勢を指示し我國の對外道を辨ずる事等にあり、其他多少の新案ありと雖ども今一々之を記さず冀くは出刊の日に於て讀味あらんことを。

四月八日以后隔週發兌一冊定價六錢　郵税五厘

東京下六番町六番地
女學雜誌社

女學雜誌　第三百四十號　明治二十六年三月十一日發兌

社説

政界將來の合縱連衡

多恨多事なりける第四議會、兎に角茲に終を告ぐ。民黨議員は面目を大にして郷關に歸り、内閣大臣は、一と先づ安息して、假りに暫らく、夢を結ぶ。夫れ、議員將來の戰略は何如に。自由黨員は、則はち曰ふ、吾輩既に言質を握りたり、口上は明らかに聞かれたり、今後は數月、敵をして思ふ存分に演劇せしむるに在る耳。其筋書の何如に不調子なる、其役者の何如に不手際なるかは、吾輩が沈まり反りて見物するによりて、彌よ明白たらんとす。此に於てか、一般の看客あきれ果て、最早や賴むまじに望みを置かじとて、全く斷念すべし。新趣向、新役者に向ふての所望茲に至りて高く、舞臺一轉後の喝采則はち目覺しきものあらんとす、と。

吾黨は、此の抱負を信ぜんと欲す。冀はくは、數多の流言を斥ぞけんと祈る。星、河野の二氏を政務次官に用ひ、板垣伯年來の次官内閣說擧行せらるゝとて、自由黨早も前日の一步讓與を爲しぬとは、恐らく虛構ならん哉。自由黨は、大政黨なり、敵と戰ふ、須らく元祿武士の如かるべし、敵すでに約して時日を假せよと云ふに、寧ろ肉薄して其戰備の整はざるに乘ずるの恡あるべけんや、とは、蓋し此黨の爲に厚く辯ずるものゝ說歟。吾黨は改進黨と異なる、立憲政下の破壞黨にはあらず、單に乘取策を案ずるものにもあらず、期する所ろは黨議を擧げて實行せしむるにある耳、行政者の彼たると我たるとは、問ふ所にあらず、是れ今回の猶豫を與ふる所以なりとは、此黨中の議者が言ふべき所ろか。吾黨は、總べて、斯くあらんとを信じたく思へり。

改進黨員に至りては、略策する所ろ果して何如ん。憫れむべきは、此黨なり。たとひ幾分の誠意ありとも、皆推なべて權謀と見らも、其氣質の癪に障はるもの多きと、其歷史の面白からぬもの澤なるとによりて、此事あり。吾黨多少の同情あらずとせんや。然りと雖ども、野心勃々、奇策縱橫なるは、

異に此黨なり。彼等は、到底長州大臣と併び立つ能はず。彼の山縣伯一派とは、其の純忠なると、其保守なるとによりて、合はず。彼の伊藤伯一派とは、其の才機等しきと、其の所要同じきとによりて、協はず。而して、彼等は、亦た長州大臣の二派が相ひ協合せざらんことを祈り、之を分離せしむるは、自黨の出世に利益なりと觀念せり。此故に、彼等は、全力を擧げて、現内閣を攻擊し、あらゆる刺衝を放つて、現内閣を分離せしめんとせり。伊藤一派、之によりて軟化するの日は、則はち、山縣一派及び國民協會派の、猪猛的に代るべき日と思へり。此の代るべき日は、撰擧干渉一類の惡政が再たび斷行せらるべき日と思へり。而して、此日は、其の到底末落の期と觀念をつけ、速やかに此順序を履行せしめ、イスカリヲテのユダに汝ぢ何ぞ早く斷行せざると促がすに似たり。大隈伯は一世の豪なり、幕下に策士猥据せり、其の戰略極めて暴なるが如くして、而も疎ならず。吾黨は、以上の忖度を以て、多少手ごたえあるべき射擊なりと信ず。果して然らば、改進黨員、今後の陣立て知るべき耳。彼等は、唯一の極左黨となり、熾んに氣焰を吐きて、彌よ内閣攻擊の火の手を高くすべし。

國民協會に至りては、言ふに足らず。彼派は、決して主動者にあらず。たゞ、山縣一派を佇望する耳、今後の運動明らかに推知すべし、温和の名を以ての保守人、殖產の名を以ての矯激者、多少之に向て馳せ加はる耳。而して、半身は薩摩武士たり、半身は米國人たる西鄕伯東に廻り、半ばは、憂國者たり、半ばは癇癪者たる品川子西に巡り、唯だ只だ、酒席の交際と卓上の慷慨と南北に反響するとある耳。

要するに、議員は皆な望む所ろあるが如し。此の望に應じて兎に角一演劇を奏せざる可らざるは、即はち現内閣員なり。殊に伊藤總理大臣なり。伊藤伯は、今や万目衆射の焼點に立てり。今回こそ滑脱として責を逃れ遠く走るべきにあらず。何れにせよ、一應の手並を現はさずんばある可らざる也。

此に於てか、吾黨は、深く伯の爲に其才を痛む。伯にして、其才を賴まんか、大事必らずや成らじ、伯にして才を弄せんか、たとひ大事成るとも、万民決して悦服することあるべからず、忠貞眞摯なる、日本人民、恐らくは、現時に於ける、尤とも公平、尤とも正當なる眞その輿論は、もはや方今の政

治革新に、才を要めずして、誠を望みとせり。今の時に於て、才覺を聞くは、五月に雨滴を聞くが如し。幸にして一度び、誠意誠心に接すとせんか、万籟静まりて虫音すゞしく、曇陰快ちよく晴れて義の太陽を見るの心地やすらん。嗚呼、今にして、祈望に堪へざるは、「誠」の一字なり。

大詔煥發す。是れ、千古一遇の大慶時にあらずや。而して、此と共に尤とも不快なる聯感を伴生せしめ、厚地深天の大御心を感佩するの忠情を曇らするものは、彼の正造子が議院内に朗讀したる一文章類似の風説にあらずや。此時に當りて、伊藤伯に望む所のものは、其才にあらずして、其の誠にあり、其巧にあらずして、其恭にあり。其の艶麗宏壯なる法文制度にあらずして、朴實質直なる實行にあり。則はち、伯が天稟の長所を巧弄快用するの時にあらずして、尤とも謹慎、尤とも鍛錬、尤とも自縛すべきの時なり。

夫れ、才子の病は、斷ずるの難きにあらずして、智ることの多きなり、行ふことの難きにあらずして、案ずることの多きなり。此に於てか、屢ば智案に空過して、斷行に遲延す、智案百出して、終始一貫せず、此故に、人見て之を誠ならずとす。斷行に遲延す、此故に、人見て勇ならずとす。若し勇ならず、誠ならずんば、大臣何をもてか重きを爲さん。天下動搖し、人心日に負くもの、則はち之が爲め也。明治年代の奇才子、列席大臣中の智人、伊藤伯たるもの、大ひに茲に鑑がみる所あらざる可らず。

惟みるに、今は是れ、王佐其の德を大用し、其任を長盡し、以て功を一代に擧げ、績を万世に遺すの好機會なり。恭しく、仰ぎ奉つる時は、文武英明の　天皇陛下、近ごろ鳳詔を下し玉ふて、神威天上に赫たり。伏して察すれば、悲しき哉、民間國士乏しく、政論私論を混ず、純良忠貞の士、誰ありてか一々、方今の自稱民黨に加擔せんや。此時に當りて、王佐其人あり、身を百性に與へ、家を邦家に委ね、鞠躬盡力死して止まざるの誠意を發揮せば、帝德茲に輝やき、民利茲に揚り、神洲の安寧、日東の進化、日を刻して待つ可き也。伊藤伯、史に精し。何んぞ此の千歳一遇の好時節に際會して、而して感奮することをせざる。

吾黨は難きを求む。何んとなれば、理想は常に難所に掛り、難所の理想を求むるによりて、初めて多少の正歩を進むると

ある可きが故也。されば、我黨は、伊藤伯に向つて、其の至難なりとする所ろを求むべし。

然りと雖ども、精神の上に求むると、事の上に求むるとは異なる。吾黨は、伊藤伯に向つて精神上、超然たる王佐の局量を求むると共に、事に於て、其の立憲大臣たるの方畧を促がさんと欲す。其事下の如し。

思ふに、純忠、山縣伯の如きは、少なし。志士、竊かに之に許すの念あり。惜しひ哉、武邊に身を立てゝ、政治に明らかならず、見識、往々武斷保守の僻に失す。而も是れ、國民協會一派の士が、伯に囑望する所以、伯の政界に勢力ある所以、而して、伯の爲に深く惜しむべき所以なりとす。伯にして、國民協會一派の追隨者なからんか、伯にして淡然幕下の士を有することあらずとせんか、伊藤伯は則はち之に合して初めて緩嚴好調の妙を得べし。惜むらくは山縣伯の勢力ある所以は、即はち伊藤伯の之と合力すると能はざる所以なり。伊藤伯は、斷然、山縣伯と斷たずんばある可らず。

伊藤伯、既に山縣伯と絶たば、他に新合する所ろあらざる可らず。何んとなれば、伯の智は之を誠にするとを得、然れども、尙ほ力を欠くとあるべければ也。伊藤伯の爲に、新たに力源を求むるときは、勢ひ之を自由黨一派の内に要せざるを得ず。伊藤伯もとより、大隈伯と久しく兩立することを得じ。否な、兩立せざるを可とす。彼等二人は、永遠の政敵にして、相撃ち以て國帑に益すべき也。吾黨が年來希望する所の者は、彼等二人が、明白に相敵對するにあり。而して、兩々代々朝に立ち、彼の山縣、谷諸氏を傍觀傍評の半黨者として、以て二個半の立憲的政戰を行ふにある也。故に、吾黨は伊藤伯と、大隈伯との截然相分れんとを促がす。而して、伊藤伯に合する所のものは、必らずや自由黨なるべしと所望し、亦自由黨なりと信ず。自由黨の俠骨は、寧ろ文事的洒落と相合すとも、貴族的豪奢と相合すると能はず、自由黨の英氣は、寧ろ幼稚なる制度家を容るゝも、忍酷薄情の事業家を許すと能はず。伊藤一派と、板垣一派とは、氣質の上に於て、寧ろ相合するに近きもの也。彼等は、共に金錢上に淡泊なるとを得べし。彼等は共に理論的西洋主義なるとを得べし。彼等は共に立憲政躰を建設するとを得べし。伊藤伯の爲に、新力源を供するものは、夫れ自由黨か。

故に、吾黨は、伊藤板垣兩派の相合せんとを望む。否な、望む耳にあらず、相合せんとするとを信ず。たゞ、吾黨が憂ふる所ろのものは、其相合せざるにあらずして、其合するの道を盡さゞるにあり。其合するの遲からんとを憂ひずして、其早からんとを憂ひとす。夫れ、朝に於ては、後藤陸奥中島三氏のあるあり、野に於ては、板垣、星、河野三氏のあるあり。歴史上、彼等が相合するを助くるの情義綿纏せり。彼等にして、相合ふと、離縁后の舊夫婦の如く、燒燼早く火を呼びて、今の儘早卒にして相合するが如きとあらば、則はち天下の大事也。政治上方今の大革新久しく復た望む可らず。故に吾黨は、此の到底は相合すべき兩派の、今暫らくは相合せざる可きとを望むや切なり。

然りと雖ども、合するとの單に遲きを願はず。其合するに於て、道を盡さんとをと願ふ。自由黨員は、外に在りて伊藤伯の改革力となるべし、大躰の改革成らずんば、兩派決して相合す可らざる也。

左れば、政界現時の衝突は決して憂ふ可きにあらず、伊藤伯は、伊藤伯として、其所信を斷行すべし、議員は議員として、其所信を斷行すべし。斷行と斷行と彌よ明別し彌よ衝突せば、則はち初めて、二個半的の立憲政戰を催ふすとを得るの時期となるべし。此時期は、遠からずして來るべし。其來るとは、必らず來るべしと雖ども、來るとの遲きか早きかは、今后民吏の施戰の模樣何如により、其模樣の何如によりて、政界革新の成否早晩を決せんとす。

壯遊遠征

福島中佐は、單騎萬里の壯旅を終りて、遠からず、同胞歡呼の裏に歸朝せんとす。郡司大尉は、今や千島拓殖の偉業を思ひ立ち、皆是れ決死の猛者一百十名を隨がへて、昨今の中に出發せんとす。前なるは、壯圖殆んど遂げ、經歷せる所ろ、譽ぽ世に知られて、聞くもの感歎すると切りなり。后なるは万事將來の事に屬すとは云へ、前途の勇ましきにありて、既に百事を預念し、大ひに心を壯んにするもの多し。此の二者は、聞くものゝ觀念を擴ろげ、見るものゝ眼界を張らしむ。日本人民が思想の領地、俄かに增大せるに均し。

吾黨は、如此き、偉圖を懷くの士、尙追々に續出せんことを冀望す。島國人民の氣象之によりて、發達すべし、細慮小念の規簿、幾分か擴張することを得可し。

此等の事あるに際し、一言の所望を、新聞紙界の人に寄せざるを得ず。問ふ、新聞紙界の探報者、自から奮ふて如此き壯遊に伴隨するの勇あるなき乎。新聞紙の記事は、讀者により て作られ、又讀者を作る。其記事斷えず政界の事に偏する時は、讀者の輿論も亦た政界の事に偏すべし。何んぞ、其紙面に此等の壯遊を細錄して、以て同胞の趣好を一變し、輿論の傾流を廣布することをせざる。

若し、此等の事、言ひ易くして行はれ難しとせば、吾黨は玆に尤とも行はれ易きことを所望すべし。他なし、新聞紙上に、內地旅行の記文を揭ぐること是れ也。今や、春風舒むろに吹き、山中の梅花も尙微笑せんとはする也。此時に當りて、尙ほ政談をのみ聞くことを樂しむものは少なし。如才なき新聞紙、何んぞ讀者に代りて一筇半笠の人を派遣せざる。

時事翁は、郡司大尉を送りて、軍艦派遣の事を說くこと可し。吾黨は、翁に勸めて、一探報者を之に添よと迫らん。時事新報昔年の田中鶴吉は、幾多の遠征者を起せり。一枝の筆の趣く所ろ必らずしも雙脚の行く所ろに劣らずと知らずや。

慨世私言を讀む

公爵近衞篤麿君、其の機關雜誌「精神」の號外として「慨世私言」一冊を發兌せしむ。

吾黨久しく此の公を重望せり。今日、此の一論檄を讀むに至りて、益々深く此の公を推敬す。文に云く、

現內閣諸公が時に侮慢の行爲を示し、時に失錯の擧動を免れざる者は、自信の厚きと藩閥的情弊を一掃するの勇なきとによれり、在野政黨員の時に猛虎の咆吼するが如く、時に駑馬の跟蹌なるが如き狀態を視すものは、輕進して遠慮の乏しきに因る、此に於てか政府は反省せざる可らす、假令ひ元勳を以て自から居ると雖、而も其實藩閥元勳の威信は最早過去の歷史中に埋葬せられたり。見よ第一回議會の開かれし當時に於て、自由黨の裏切連と呼ばれたる自由倶樂部員の如きも、今や再たび自由黨と

合して諸公の勁敵たるにあらずや、其半數は元來吏黨と稱せられたる同盟倶樂部の如きは、今や民黨の旌旗の下に立て反對の喊聲を揚ぐるにあらずや、純然吏黨の綽號ある彼の東北組なるものも亦國家の大問題に當ては、所云る民黨と進退を與にするにあらずや、中央交渉部なる吏黨の一分派芝集會所連の如きも、時に民軍の突進を傍觀して快哉を呼ぶにあらずや、民軍年に其兵數に勢力を倍蓰し來りて、藩閥的元勳の威信月に漸やく薄し、尚且つ何を恃みて以て其自信の心を強くせんと欲するか。究迫其極に達せば、衰龍の袖に潜伏するも何の効かあらんや。然れども、是れ精忠殉國の思想に富める功臣の爲し能はざる所にして、國民の坐視するに忍びざる怯懦奸譎の擧動なり、其罪固より死倘ほ輕しとする所、功臣たる者豈斯る行爲あるべけんや、然らば諸公の將來爲す所如何ん、曰く、悃誠摯實、赤心を國民の腹中に推し、忠肝斃れて而して後已むの決心覺悟是なり。

堂々たる大論。識見あり、氣慨あり、精神あり。眞個に俗を脫したる國士の至誠論たるなり。

一轉して其の民黨に慨するや、彼が上奏の事を輕々しくするを責めて云く、

試みに思へ、國家の大事を論議し、議會最終の手段を決行するに方て、其論據の本元を討究査明せずして、徒らに漫然其枝葉に合同す、之を責任ある者の行爲と稱すべきか、左なきだに確乎抜く可らざる藩閥的根帶を固めたる内閣と戰ふに、聚散常なき烏合の衆を以て之に當らんと欲す、迂濶も亦極まれりと謂ふべし、斯の如く一戰必勝の胸算を有せず、紛然囂然空しく日子を徒費して以て世に危惧の恐を懐かしむ（此一句、眞誠國士の忠あるものにあらざれば能く懐ひ至るとなし）之を國民を代表する名士の行爲として許すべきか、爭はんと欲せば、勝敗を賭して爭はざる可らず、龍頭蛇尾の紛爭軋轢は、堂々たる大丈夫の爲す可き事にあらざる也……所云る民黨なる者の本心斯の如くんば、天下の事知るべき耳。

至誠慷慨の情、同念に堪ゆ。而して、其の現内閣に要むる所は、

現内閣を以て藩閥的元勳組織の最後内閣と確信し、至公

至平の施設を為して長へに國民の胸底に諸氏の紀念碑を建立し、以て潔よく樞要の地位を勇退すべし、

と云ひ、民黨諸氏に勸むる所ろは、

諸氏が勇進敢行して藩閥的元勳內閣を倒さんとする、其志壯なりと雖ども、然れども唯だ乘取主義の為に役々として其他を顧みざるは、諸氏の為に深く惜まざる可らず。政黨內閣の時機は諸氏之を求めざるも亦自から來らん、諸氏徒らに急躁を事とせず、此際に於て宜しく同志和合するの計を講じ、堂々たる一大政黨を形つて、眞正なる政黨內閣の準備を為すべき也。勿論今日と雖ども元勳內閣を倒し得ざるにあらざるべし、自から政黨內閣を組織し得ざるに非ざるべしと雖ども、力足らずして之を為すは僞也、僞は以て國家の重に任ずべからず（此一句、亦是れ堂々國士所懷の誠意、方今何等の政治家ぞ能く此の自信を有する）諸氏たるもの自から省る所なくして可ならんや。

と云ふにあり。

夫れ、國士に要する所ろは、第一、至誠公平にあり、達觀、識見、度量、精神、技倆之に次ぐ。而して能く之を兼ぬるものは少なく、兼ねざるも、最要素を多く有するものは太はだ尠し。茫々たる我國の政治界、虎あり、狼あり、狐あり、猫ありと云ふと雖ども、眞個の達士を見るは、極めて稀なり。心、百年の改革を期し、職を根本的の事業に執れるものにして、一と度び眼睛を直接目前の政界に放つとき、何んぞ慨然として長歎し、筯を投げ、經を閉ぢて則はち起たんとするの精氣屢ば勃發せざるを得ん。數度び、政界を觀じて、數度び、寂寥の歎ありける憂國の人は、近年公爵其士の如きを得て、密に多望感謝の思ひあるべし。此著小冊子と雖ども、本誌其の所々を拔摘して、殆んど、六分の一を割きたるもの、深く念ふ所ろあるが故なり。茲に遙かに情を寄せて、公の清健を祈る。天下、公と同じく國事を見るもの少なきにあらじ、我が公、冀はくは、少しく懷ひを安くせよ。

陳平は賢なりと雖ども魏倩を須ちて后ち進み、韓信は奇なりと雖ども蕭何に賴りて后ち信ぜらる、是故に孔子は管仲を賢なりとせずして鮑叔を賢とし、子產を賢なりとせずして子皮を賢なりとす。人を薦舉するの要韓愈かつて之を論ぜり。

雜録

新土佐日記（抄摘）

（一）はしがき

此記、明治廿五年十二月廿七日より、翌る年、一月廿四日に渉る。大凡そ、一月がほど、古し紀の貫之が遊びたりてふ國に旅せし事を記すとて、題して新土佐日記と云ふ。夜なく暇まを客窓孤燈の下にぬすみて、家人に經歴を知らしめたるの書信なり。家人、續次に纏めて一冊子となし、極親の知り人三四に見せしかば、今は傳へて之を評するものあり。則はち、其勸奨にまかせて、玆に日記中の數節を拔載せしむ。そは、事の趣き、私し事のみにあらず、多少人に告げて公評を請くるも亦可ならんと思はれたればなり。

（二）新職任

去年秋、大坂に日本基督敎會の大會あり。大會議塲に、傳道振張の精神熾んにして、玆に、一年間高知縣下大擧傳道の案出で、滿塲一致の贊成にて、最と快ちよく之を可決したり。其案の大躰に云く、今に方りて傳道に望あるもの、高知縣下を第一とす、願はくは、一年間大擧して之に當り、傳道者十名を、縣下の要處十ヶ處に配置し、都より、三回、宣敎者を派遣し、巡回と定住との傳道をもて、此の一と年、大ひに振起せしむるものあらんと。議決してより、準備一と方ならず、片岡健吉氏は、此の傳道の委員長となり、山田平左衞門、坂本直寛、細川義昌の諸氏、皆な之を助け、高知敎會の會員亦た大ひに覺悟する所ありと聞えたり。斯て、定住傳道者の聘に應ずるもの、白金明治學院の神學校より續々起り、巡回宣敎者たるもの、博士ノックス氏、敎師植村正久氏任に當り、更に一人を欠く。則はち、余を促がして其欠を補へよと迫られたりと雖ど、余は從來直接傳道を任とせず、使命其途に存せず、天稟之に適せじ、恐らくは他に其人あらんとて、固く辭ひたり。然りと雖ども、心友植村氏が再應の勸告默止しがたく、亦他に省みる所もありて、左らばとて、其聘に應ず。是れ、余が一生に於て、直接傳道者として、亦た傳道會社の賴まれ人として、任を受けたる最初の經驗なりとす。

海石榴舍歌話　第二

中川恭次郎　記

くすしの歌よみ

學問すたりて、醫師と法師との外は文字を解せさりし世はおきていはず、文化文政よりこのかたと云へとも、本領は醫師にして、歌よみの名世にとゞろきたる、少からず、まづ安田躬弦は通稱を一庵と云ひ、號を棗本（なつめがもと）と云ひて、歌は加茂季鷹が門人にて、福井藩の醫官なり、草根集類題抄、曾丹集標註等著述多し、村田春海の弟子なる本間游清は、伊豫吉田藩の醫なり、高田與清の說に、游清と片岡寛光との起れるは、實に錦門（村田春海、織錦齋と號す、その塾を錦門と云ふ）和歌の榮と云ふべしと云へり、（愛憎甚き與清が說なれば、打まかせては取あげかたけれど）、同じく春海の弟子なる清水濱臣は最世に聞えたり、濱臣通稱を玄長と云ひ、號を泊洦舍と云ひて、町醫師なり、學和漢を兼ね、歌をよくし、考證にたけたり、唐物語標注、縣門遺稿、庚子道の記標注、月詣和歌集標注、管根集、問答雜考、古文類葉、泊洦筆話、泊洦舍旅路の打聞、泊洦舍集、語林類葉、據字造語抄、清石問答、皇朝喩林、總常紀行など著述甚だ多し」、學才は濱臣に劣れど歌におきては並ぶものなきを井上文雄となす、文雄通稱は元眞、號を柯堂と云ふ、田安家の侍醫にして、岸本由豆流の門人なり、嘉永慶應の間この道の泰斗と仰かれたる人にて、古學小傳の著者の如きは、景樹以後の歌口なりと稱へたり、歌集を調鶴集と云ふ、伊勢家苞、冠注大和物語、大井川行幸序標注、さきはひ草、道のさきはひ、假字一新等著述少からず、文雄の歌は誠に巧なり、然れども巧のはては遂に滑稽に陷るものあり

さみたれはいもか誓言おもほえて
　いつはるべくも見えぬなる哉

つれ〴〵の遊がたきにたのむには
　草木の中のひとぞよろしき

たびねするよるの衾のもの丶香は
　まゝとにくさのまくら也けり

などよめる如き是なり、されどまた

つゆなからくずの花ちる山まどに
　世のゑいさめて月を見るかな

古里のあはれのかきり見つるかな
奈良にあすかに寺めぐりして

などを打誦しなば、葛の花の清き調べには、もの丶香のくさ丶もけされぬべく、古さとのあはれなるおもむきには、妹が誓言のたはれたるもはすられぬべし、この人の歌になりけり。といへるてにをは多しとて、例の口わるき小林歌城

歌みれば同じてにはぞよまれける
あれぬなりけり是もなりけり

と云ひて、あざけりしよしなれど、おのれが見たるところにては、こぼると云ふことばを用ひたると、てと云ふてにをはをかさね用ひたるとぞ、中々に目には立ちける、さればいまたはむれに歌城が顰にならひものせんに

歌みればこぼる丶ばかり多きかな
同じてにはを取りてつかひて

とも云ふべきや、をかしくは笑ひたまへ、この人の長所を取りて短處を捨てたるは、門人横山由清の歌集月舍集なれど、取りあぐる人の少なきは、例の近きに驕りて、遠きに媚ぶる世のならはしにや、また近きころ或先生のものせわれし文中に、文雄が學才の少きとあばめられたるふし見ゆめれど、こは歌よみと國學者との區別を知らぬにて、いとかたはらいたき説なりけり。

信仰と愛

山月子

信仰の人物は深く基督を愛ず、基督の爲めに己を棄つ、故に基督彼に在り、

信仰の人物は深く信仰の人物を愛す、何となれば基督彼に在ればなり、

我の衷なる基督、彼の衷なる基督を愛す、愛彼我を一にす、以て愛に神聖なる夫婦、朋友、兄弟、親子、社會、國家、天下を造成す、天國乃ち此世に來れりと謂ふを得べし、

吾人此心を以て愛に對す、誠に敬虔儼肅の思なくばあらず、エデンの春花を眺めて、同時にシオンの秋月を望むが如き感なくんばあらず、パウロテモテに書を寄せて曰く『誡命の主意は愛なり即ち潔き心と善き良心と僞なき信仰より出づ』と、是れ實に吾人が愛する所の愛なり、信仰なくば、戀愛も、友情も、愛國心も、吾人は其間に喜ぶべからざる分子の混ぜん

ことを恐る、故に吾人は人を愛し國を愛するの情切なるに隨ひ、愈々益々信仰の重要欠くべからざることを主張す。

ウ井ルヘルム、テル　京都　橋本　曙月

新年附録に、紫琴山人のものせられし、ウ井ルヘルム、テルの中にて、民の仇なり、妻の仇なる、ロッスベルヒの城司を斃ほし、海邊に走り來り、舟子をいどむベウムガルテン、

疾く舟を　出して我を　助けてよ
　時はせまりぬ　やよ舟人よ

激浪を懼れ、舟子は舟を出すとを肯ぜざりき、

遁るべき　みち知りながら　たどり得ぬ
　君の心の　いかに悲しき

彼すでに舟出せし後、仇人來り海邊に馬を立て、齒切したるかた、

あら駒を　岸邊に立てし　大丈夫の
　心の海や　たちさはくらん

其の後、テル父子山に入りたる物語中に、

ともすれば　峯の雪崩を　受くるとも
　自由の民と　なるぞうれしき

惡司ヘルマン、ゲスレルが命により、ワルテル、潔く林檎を頭上に頂きたてるかた、

とく射ねと　父にすゝめて　勇ましく
　たちたる君の　かけぞ見えける

其の父ウ井ルヘルム、テル、弓射るかた、

あはれなる　心の弓弦　引きしぼり
　放つ矢先は　神ぞまもれる



史傳

亞伯拉罕（アブラハム）（其三）

土井久壽彦

やがて、埃及人ハガルに、インマヘルと名くる者生れたり、何ぞ圖らんや、アブラハムの家庭を亂す者は、是れ此の「野驢馬の如き人」ならんとは、ハガル其主に子なきを見て、次第にサライを藐ずるに至れり、

　サライアブラハムに言けるは我蒙れる害は汝に歸すべし、我わが侍女を汝の懷中に與へたるに彼れ己の孕めるを見て、我を藐視し、願くはエホバ我と汝の間の事を鞫きたまへ、（創一六〇五）

と於是、サライイタク彼を苦めければ、彼遂にサライの面を避けて曠野に逃れたり、

アブラハムは苦めり、サライは焦てり、神の國民を形成せんとするも、我に子なきの一事に至りては窮縕相對して、殆んど狂するに至れり、遂に拙劣なる人智の手段とは言ながら、漸く一子を得たれば、兎も角も之に因りて安ずるを得べしと思ひきや、其とへ適々以て家庭を擾亂するの媒となれり、區々たる人智、玆に至りてか空しと謂ふべし、薄弱なる人間の手、如何に造化に逆ふも、造化の大經綸は漫々乎として其往くべき所を趁ふて走れるなり、

　神又たアブラハムに言けるは、汝の妻サライは其名をサライと稱ふべからず、其名をサラと爲すべし、我彼を祝み、彼よりして亦た汝に一人男子を授けん、我彼を祝み、彼をして諸邦の民の母とならしむべし、諸の民の王等汝より出づべし、（創一七〇一五—一六）

天の使の一人も亦た彼に言ふ、

　明年の今頃我必ず爾に返るべし、汝の妻サラに男子あらん、（創一八〇十）

と、サラ時に其後なる天幕の入口にて聞居たり、アブラハム哂て曰く「百歳の人に豈で子の生るゝあらん」と又た曰く、サラは九十歳なれば、豈で生ことをなさんや」と、彼の妻サラも亦た心に哂ひて言へり、「我は老衰へ、吾が主も亦た老たる後なれば、我に樂あるべけんや」と、吾れ於是乎アブラハムもサラも眞に好個の人間たるを見るなり、

神の言、果して空しからず、サラ遂に孕み、神のアブラハムに語たまひし期に及びて、年老たるアブラハム男子を生めり、」新國民の相續者は生れたり、多年窮縕の心中に挾りて釋けざりし、難問題も是に至りてか全く氷解し去れり、乃ち其名をイサクと名づけ、第八日には割禮を行ひ、かくて其「乳を離るゝ日に、アブラハム大なる饗宴を設け祝福を至高き神に需めたり、

今よりして曩昔を思へば、アブラハムの身に取りては、座ろに感慨至極に堪へざる者あるならん、彼固より神の正しきを信ぜり、毫も之を疑ふの心なし、之を信じ、之を疑はざればこそ實に神命に惑ひたりしなれ、彼れ神の攝理を知れり、靜かに神に一任するの安きを知れり、之を知るの餘り、やがて出づべき旭日を忍びて俟つ能はず、反て燭を點ぜり、是れ薄弱なる人間の實に免る能はざる所、今日と雖ども猶ほ此拙策を繰返す者夥多あるに非ずや、遮莫れ、彼は今や神命の諒に確かなるを觀、省みて己が修養の足らざるを思ひ、激勵憤發自ら鞭ちたりしならむ、天柱折け地維缺くるも、己れ再び過を重れざるべしと、深く自ら決したりしならん、何に由りて之を知るか、看よ、彼が神の命に應じて毫も躊躇することなく、直に起て其子イサクを神に捧げたる其壯烈を看よ、吾れ此に因りて之を知るなり、

新國民の相續者、彼が畢生の希望、天地にも替へ我身にも替ゆる能はざる彼が思の凝集點、——其子イサクをば、今や神命によりて、燔祭として献げざるを得ざる、切なき場合に遭遇せり、

　エホバ言給ひけるは、爾が愛する爾の獨子を携て、モリアの地に到り、我が爾に示さんとする、彼所の山に於て、彼を燔祭として献ぐべし、（創、二二〇二）

彼玆に至りて、其心中少しく神命に惑ひ、希望の光を、晦したるや、否や、吾れ之を知らず、然れども彼が直に其命に從ひて、「朝夙に興き其驢馬に鞍おき、二人の少者と其子イサクを携へ、且つ燔祭の柴薪を劈りて、起て神の已に示したまへ

る處に赴けるを見れば、最早昔日サラの誘に從ひたる、アブラハムに非らざりしを見るべし、アブラハムの性格も爰に至りて尚一層を進めたる者と云ふべし、行程三日其處に近く、「於是アブラハム其少者に言けるは、爾曹は驢馬と與に、此に止れ、我と童子は彼處に往きて、崇拜をなし、復た爾等に歸らん、」と「乃ち燔祭の柴薪を取りて其子イサクに負せ、手に火と力とを執て二人ともに往けり」

アブラハム燔祭を神に献ぐといふ、然れども其羔はなし、數日の旅路短かきに非ず、日夕四方山の事を談ぜり、然れどもアブラハムの話頭一度も其羔に及ばず、今や燔祭の場所は迫りて目睫の中に在り、思ひ來ればイサクの胸中、頗る怪訝に堪へざりし者ありしならむ、即ち父に問て曰く、

火と薪はあり、然れど燔祭の羔は何處にあるや、(創、二二〇七)

と、嗚呼此一言アブラハムの胸中には如何に響きしならむ、万雷殷々耳を破るの音よりも猶ほ烈しく聞へしなるべし、當時の情想見するに餘あり、アブラハム曰く、

子よ、神自ら燔祭の羔を與へたまはむ、(創二二〇八)

と、彼れ固より之を知らず、我も亦た殆んど之を知らず、かくて「二人偕に進みて、遂に神の彼に示し給へる所に到れり、是に於てアブラハム彼處に壇を築き、柴薪を陳列べ、其子イサクを縛りて、之を壇の柴薪の上に置せたり、」嗟呼是れ神の民の師表、信仰者の精神、新國民創礎者の氣象なり、アブラハムの性格も是に於てか、其絶頂に達したりと謂ふべし、

「斯くてアブラハム手を舒べ、刀を執りて、將に其子を宰さんとす、」此間實に一髪を容れず、時に聲あり、聲あり、天より聲あり、曰く、

アブラハムよ、アブラハムよ、汝の手を童子に按する勿れ、亦た何をも彼になすべからず、汝其獨子をも、我が爲めに惜まざれば、我今汝が神を畏るゝを知る、　(創、二二〇一一—一二)

「茲にアブラハム目を擧て視れば、後に牡綿羊ありて、其角林叢に繫りたり、アブラハム即ち往て其牡綿羊を執へ、之を其子の代に、燔祭として献げたり、」於是乎始めて子イサクの疑團も釋け、父アブラハムの疑團も釋け、天下万民の疑團も釋けたり、アブラハムの精神も爰に顯はれ、神の慈愛も爰に顯はれ、年經て來るべき靈界大王の影も亦た爰に啓示せられたり、

エホバの使者再び天よりアブラハムを呼て言けるは、エホバ諭し給ふ、我己を指して誓ふ、汝是事をなし、汝の獨子を惜まざりしに因て、我大に汝を祝み、又大に汝の子孫を增して、天の星の如く、濱の沙の如くならしむべし、汝の子孫は其敵の門を獲ん、又汝の子孫によりて、天下の民皆福祉を得べし、汝我が言に遵ひたるによりてなり、　(創、二二〇一五—一八)

アブラハムの獨子を要求し給ひし、慈愛の神は、又た其最愛の獨子をも惜み給ふことなくして、此罪ある人間に與へ給へる、慈愛の神なり、神は昔も、今も、何時迄も、毫も變はり給ふことなき、慈愛の神なり、アブラハムの子孫よ、繁殖よ、新國民よ、榮へよ、地の極より地の極に迄擴がれよ、爾に非ずんば、いかでか神の國を此上に見んや、

アブラハムの傳記を讀みて、こゝに到る、さながら曲折迂回樹木鬱茂の山路を辿り來りて、海濱に出で、天空無涯の大洋を望みて立てるが若きの心地せらる、是より以後、彼が傳記に於ては左程の目立つべき者あらず、思ふに翁媼相與に力を其子の教育に効したるならむ、而してイサクは實に健康に其下に生長したり」自是さき、ソドムの如き、ゴモラの如き、ヨルダレの任地、エホバの爲めに滅さる事の、アブラハムに關する者は、唯だ彼が亦誠を盡して、之が爲めに祈禱したることあるのみ、是れ適々以て彼が前憂後樂、一視同仁的の心腸を見るに足るべきも、其一生に於ては寧ろ影響する所、尠なきが若し、

幾もなくして、サラ キリアテアルバにて死せり、アブラハムの半身は是に至りて此世を去れり、偕に喜び、偕に憂ひ、艱難辛苦相偕に嘗め、歡樂愉悅相偕に樂し來りし、彼が畢生の友は、今や「マムレの前なる、アクペラの野の洞穴」に眠れり、悵恨悲痛アブラハムの老も爰に一層を重ねたり、

イサクは神の祝福によりて生長し、今や一個の男子となれり、老アブラハムが此世に於る最後の事業は、唯だ其子の爲めに、サラの我身に於るが如き、死生相渝はらざる、一人の友を擇ぶにあり、老僕エリエゼル、彼が使となりて、其郷里に到り、快活にして慮に富む、一少女を神より享けて皈り來れり、後來リベカとて、面白き活劇を、其家庭に惹起せし婦人は、是れ此一少女なりしなり、於是

「イサイリベカを其母サラの天幕に携至り、リベカを娶りて其妻となして之を愛したり、イサクは母に別れて後ち、玆に慰藉を得たり、

アブラハムの一生も此に至りて最早不足なしと謂ふべし、顧みて過にし經歷を回へば彼が感慨果して如何なりしぞ、今や相對して曩昔の事を談ぜんとするも、彼が唯だ一人の對話者は既に暗黑の彼方に隱れて見へず、今は唯だ其事業を取て、進步の神に一任し、己も亦た逝て、靜かに其友の傍に眠るは、彼にとりて寧ろ願はしき事なりしならん、「アブラハム遐齡に及び、老人となり、年滿らて氣たえ、死して其民に加はる、其子イサクとイシマエル之をヘテ人ソハルの子、エフロンの野なる、マクペラの洞穴に葬れり」、嗟呼アブラハム以て瞑すべし、

之を要するに、キリストの光を以て、アブラハムを照せば、アブラハムは實に一個の影にして、之を譬ふれば猶ほ小兒の大人に於るが如きの觀なきに非らずと雖ども、然れども之をとりて、人間てふ平準に置きて考察せば、彼は確かに一個拔群の人物にして、直接に間接に人類の歷史に一種の色彩を加へたる、崇高偉大なる歷史的人物なり、而して其一生は神の大經綸に契合したるの一生にして、彼が自ら處せる所も、亦た實に玆に在りたるが如し、

（完）

小說

蛇物語

（其三）

花圃女史

夜はこゝのみをよぎて更行けん、天井に幾個と數しれず、ともしつらねし燭に、夜をひるにしての舞踏會、ワルツの音樂、涌がごとく羽衣霓裳のそでをつらね、とみを競ひ、流行を追たるに、足並の功をこらしててまひ遊ぶ、天津乙女かとまがふ斗りの貴孃紳士、かつより、かつはなれ、余念なく踏る有樣をよそに見て、二人むかひざしたるは、かの畫工と美はしき乙女なり、乙女は懷かしげにうち見あげて

女「さらば、もはやかきはて給ひしにや、ながう逢見奉らざりし事よ、何をものし給ひしか、告給ひてよ、告給はずともこの前ののやうに陳列所に行て必見さだめ侍らんなれど

畫工「否、ゆるし給へ、あまりに希代のものにて今しばし洩し聞えんは難義なり、されど、卿の批評をうけて今日迄、いかほどの益を得しか、さりとはいへど、他のものとかはり、てこの度のは、今はいひ得がたし

といひつゞけて又

畫「なにゆゑにトリースよ、けふはふさぎてゐ給ふか、ちかうより給へ

とおどろきたる聲音にいふは眦に露おける女の顏をみとめしなり、

女「ナニといふ譯なけれど、今宵のものかなしきは、ばか

らしう、わらはすら思ひ侍るやうにて
と切につくる笑顔も淋し、畫工は手袋はめし、さゝやかなる手を取り、わが身の兩手にさしはさみて、思ふやう、この日頃、畫にのみ心忙かしく、遠ざかり居つればぞ、かくはかなしと恨ずらめ、其ひまも、しばしだに忘れざりしものを、なにとして、其意を通ぜんと、ふと心付けば、片時も手にはなたぬ指輪を我室に遺わすれたり、あはたゞしく立あがりレトリスの前にうち屈み

畫「こはいかにせん、かの御身よりうけし指輪を忘れたり、
されど、心にかけ賜ひそ、今直ちに取きたらん、この家の階上、ほども遠からねば、直に歸りきたるべきに

レトリスは男の手を取りて

女「今宵はまた長がう逢見ぬに、とく還りきたまはずば、
かなしからんを、とくかへりきたまひてよ

と心細げにいふを、なぐさめ、手をとりしめて、二人づゝ新たにはじまりし音樂につれて、組合ふ男女の群を、かき分けて、畫工は立出ぬ、

（四）

忘れし指輪を持こんと引かるゝ心はげまして、一人こゝを立出れば、室の外は靜かに更わたりて見遣る街上に、人影なくつどへる客の馬の嘶、車のかげ、あざやかに照らせる月は空高くすみて、光しろう、敷石の兩側に立る並木の地上にうつる影、ゆるがぬにもしづけきさまぞしらる、畫工はふと佇みて遙かにこの町つゞきのかなたのけしき迄おもひやりぬ、綠もゆるやうなる牧場の狀、木立しげき森などおさなき折遊びなれしすさびをおもひ出るに、想像はいよ／＼走せて、いつかかのレトリスの手をたづさへ、この月光に浴しつゝ、そこらの野をわが行心地し、耳に入小川の囁、牧獸のすゞの音、花の香、のどかにかをりくるやうにおもはれ、たゞめの前に我姿さへ現じきたり、魂もぬけ出しやうに、一あしあゆみては立止まり、二足あゆみてはあなたをながめ、遂に近づきし階段、心ともなくのぼる時、涌泣如き音樂の音はそれとなく拍子あはする力なき足音にうち和しぬ、のぼりはて、われにかへりし畫工、鍵取出て戶を一息におしあけぬ、うちには快よくねぶれる蛇、不意の驚きに滿身の鱗、こと／＼くさかだちて、かま首たて、此方、をキッと見やり裂けし口にふく息、炎をな

せり、闇き室内にも輝く兩眼、それと見より畵工のあわたゞしく退く一歩に、ひらかんとおもひし扉は、躰に押されハタと音してかたく立切れたり、この時疾し遲し、叉この響におどろかされ、蛇は眞向に、飛かゝりて脛のあたりへクル〳〵と卷付ぬ、しむる力のつよさ、左右の手に滿身の力をこめてさゝゆれども、いかにともせん術なく、たれぞ〳〵、とうちわめく息づかひくるしく、あなたにのたうちまわり、こなたにもがけば、いよ〳〵幾重にもまとひまとふ、蛇の力くはゝりて、人事不省の界に入ながらも、おさなきより、聞しかゝるおそろしき、物語りの數々をおもひ出、助かるじまき命とおもへば、わり〳〵と、めに入レトリスの、しばし先に見し花の姿、心もとなげに見送りし眦、アナくるしや、レトリスはいかにしつる、さま〴〵豫想せし樂も今こゝに消行身とはしらじか、レトリスよ、レトリスよ、と虫より細き聲によぶも苦き中の一生懸命、我身はかしこにも聞こえよかしとうちわめくも、しだい〳〵によわり行しが、二度ヒヨロ〳〵と立上りて、かべにかけたる小刀を右の手にとり鞘を片手に拂ひのけ左手を卓に杖つきて、眼もすわり、出る息はげしく、吸息くるしき腕に力をこめ、幾度も空を突き〳〵遂に蛇の咽喉のあたりさし貫ぬけば、少し力を弛めし蛇更に苦痛の力増してキリ〳〵と卷付けば、なほ幾度も手を動かしながら、刀は其儘戞然と落てウーン〳〵と唸る聲すさまじく、するどき眼豁と見開らき双手力なくうちたれて、うしろざまにバツタリと倒れぬ、

更わたる夜のものすごく音樂もいつかやみて、入方の月のかげうすぐらく、さや〳〵と梢をわたる夜風、今更に音たかく傷きし蛇と冷血をたゝへし人躰、抱き合てふせし室内にふき入りて腥し、

しばしありて、明はなるゝ空、紅をひき、群鳥の囀うれしげに、さし込朝日はいつもの如く、色破璃にうるはしく、かの畫に反射して活々とおそろしき斗りなるを、こゝに身みづから、一身こめてゑがきなせる蛇の爲一身こめてうちあらそひ、つひに身を一葉の畵の爲に犧牲として、重なりふせる畵工の姿涯然と、神の罰を偶像拜せし爲にうけし以色列人の有様やこれ、この世に殘る心はふたぎあへぬ眼にいちじるしく、なほわが畵にみえぬ眼の視線を濺ぐ精神去らず、つゝか

ぬ息によびし名のあたりにさまよひ行べき魂魄はたのしき御園にむかへさせ給ふ御手をもれて永遠に恨をとゞむべき實物の相形、それにおとらぬ畫様の巧、一目慄然をふるはるゝ室内にたゞ〳〵忘れし卓上の指輪のみは獨光も燦然たり。

ローレンス

第二回（上）　インヂロー作

若松しづ子譯

此家内決議に一同が滿足を表してより二年の幸福な年月を一日〳〵と樂しく送り升た。然るに此幸福を極めた境遇にさすらふ壯年、しかも世運と春秋に富み、愛せられ、珍重される者が不思議にも、一種の煩悶を覺え始め升て、何となく心穩ならず、物思はぬ昔とうつて變つた世の床しく致密なる美に眼を止め、其音樂に耳を澄ます樣になり升た。蔽はれたるを顯はし、物事の形容を變化せさる不可思議なる光明の中に往復し始たる身の、運命といひ、悲哀といひ、年月といひ、死といひ、生命といふものに得もいはれぬ深重な趣味を認むるとになり升た。かく人の心の安穩を破りつゝも是を高める一種の光明を人は戀愛とはなづけ升。

壯年が愛した婦人といふは美しい眼元にどこか謙遜な處がある人で、口數すくなく、考へ深く、眞面目に、信實なたちでした。相逢ふ折のある時には冷淡な素振りしてわざと人の思ひを募らせ樣ともせず、俄かに疎〳〵しくして壯年の心を苦ませる中に一層望を高める樣なともなく、重げに愛苦しき眼をそれと見て、下へ向るともなく、たゞ何氣なくしたやうな挨拶して壯年が心に餘る思を言葉に移す間あらせず、行き過ぎたあとに、一方はもどかしさに總身を戰わせて居り升た。婦人は氣にも、人欺かぬ眞心と確と志す處とがあつて殊更壯年を疎んじて居るといふとをかく紛れもなく明らさまに示したものゝ、戀がたきのあると知らぬ中は望もなく、落膽もせず、たゞ現在を樂しみに暮らし升て、一旦戀愛の深き淵に陷つては、押寄する大浪に頭を擡げるとさへ叶はず、況して遠く天涯を探り、己れが漂わされんず方向を見究めるとなどは爲し難いとでした。

久しく此有樣で續く中に無慘にも俄かな運定めが有つて、壯年はこの發明には胸を絞り升たが、これはツイ正午を告る鐘

の響く間のことで幾多の希望は忽ち消えて、あとに悲痛を殘し升た。

ころは降雪の時で、壯年は折しも霏々と降りしきる雪の中を歩いて居り升たが、敎會堂の小道を横切らんとする頃に丁度鐘が鳴り始め升た。玄關の前へ來て、フト何心なく中を見ると、兼ての戀人が雪を凌ぎにとゝへ立寄つて居り升た。綻び始めし花の顏は嬉しさにホンノリと紅を染め出して居ましたが、側に腰かけた男子は婦人の手を自分の双の手に握り恭しく接吻する處で、優にすゞやかな其眼もとは知りそめた初戀のうれしさに恍惚して居升た。兩人とも此時雪を踏み別けて行く壯年と顏を見合せ升たが。壯年はそれと悟つて、帽を擧つゝ辭し去り升た。總て時計の鳴り始めて、鳴りやむまでの一分時で、雪は續いて降りしきり、壯年は歩を進めつゝ茫然雪氣色を眺め、ある野原へ出升て骨身に徹した寒氣を認めぬでも有ませんでしたが、たゞ何處より出でゝ、何處へ行くとも知らぬ人の如く、とりとめなく歩み升た。

軈て小山の傍から砂利を堀り出して地面の少し低い處へ來かかる時に人の助けを呼ぶ聲が有升て、聞くともなしに、其聲を認めて、行くともなしに近よつて見升と、百姓やに奉公する小女が灌木に吹きよせた雪の影から身を起して、「ありがたい〳〵、助けて下さる神さまが有がたい」と叫んで居り升た。熟と瞳を定めて見る中に感覺の力も我に戻り、さて小女が歯の根も合はぬほど戰て居ること、寒さに手足はしびれて用をなさぬことと、古シオールに纒はれて抱かれた小兒が不審さふな憐を乞ふ樣な眼つきして自分を見詰めて居たとに始めて氣づき升た。小女は泣聲を擧げて「わたしはモウ凍へて死んでしまうかと思つたの、旦那さん〳〵」といつて抱いた兒をさし出して、取つて貰ひたさうでした。壯年は小兒を抱きとり、シオールを小女にかへして、小兒は己れの上着の中にくるみ升たが、抱かれて嬉しげな其兒が小さな丸い顏を胸にすりつけ、小さな赤くなつた手が温みを探り求め升たとき、壯年の苦痛ある心にも堪へ難きほどの憐愍を感じ升た。小供等は朝まだきより乳しぼりに出かけ升て、吹雪の中をまろびつつ彷徨つて居り升て、今は寒さと疲勞に總身殆んど疲て、手をとつて引行く壯年の腕さへ痿れる計りでした。小女は殊勝にも薄着の己が身を惜いて年若な小兒を母の如くに庇つて居

たのでした。雪はます／＼降り增り、上が上に追ひ來るふゝきに呆るゝ斗りの世界は乍ち平常の美事な姿を失はれ、遠近の山／＼は渦まく雪の綿冒子に包まれ升た。此大嵐の中に兩兒を引もし負ひもして辿り行く中に年若き方は嬉しげにかくれ塲處から覗いて居り升たが、年がさの小女は折々かふいつて嘆き升た、「アノうちでたゝかれ升よ、アレ、マア、あの鑵を、乳の鑵を原へ置いて來升たよ」壯年は小女の嘆と己れの嘆を比較し、慰める言葉も出ませんかつたがおもへば、小女の嘆も中／＼容易あらぬヿで、心一杯になつては餓も苦痛も忘れるほどであるが、自分の嘆とてそれに越ヿはないと覺悟いたし升た。

さて兩兒を其家に連れかへり升て、俄かに我にかへつて見れば小女の哀れ氣に訴ふる繰り言をよくも久しく堪へて口を開かなかつたヿよと我ながら不審におもひ、金子を償ふて詫言をいひ、家の人々が「よし／＼、何もいわずとも好い、おまへたちのヿを案じて居た、乳の事はなんでもない」といふのを聞き、再び外面へ出で、雪の中を辿りつゝ心を靜めて面白からぬ殘生を如何に送らふと思案いたし升た。誰そがれごろには我家へ歩みつき升て、家のものゝ何氣ない話しに耳を傾けて些かの心遣りにいたし升た、最前聞いた「そんなヿは何でもない」といふ言葉が結ぼれた心に果しもない反響にひびいて、我れと冷笑する苦しさを幾分か紛らされて、物憂さに堪へがたき心を俄になだめて、口の中に「あゝなにヿがあらう、何でもない」と續けていひ升た。家のものゝ話しを聞くにつけ、別段他のヿには變化はなく、其日優に床しき樂しみの籠つた希望は全く消え失せたヿは一向知らぬ父上は心易けく居ますヿを知り升た。元より父に告ぐ可きヿでは有ません故、最も近く親き人々にも何ともないと同しでした。それ故山の木を伐るヿ、實入りの好い田畑のヿ、利益の多い市などの、話しを聞升た。家の人の目論見は皆自分一人の爲でしたが、談話のと切には例の反響が身の邊りに群がり、たゞよひ升た。本心に立歸つて考へれば、けふもこの後いつまでもこのヿは秘て家の人に知せぬが肝要といふヿを悟、心の苦痛は秘よふ、寢ず番をする積で秘よふ我に悲嘆ありとて何しに、此三人の安心を破れやうと覺悟しては、現在の我は暫らく追ひ遣、耳を強て其談話に傾け、我聲とは思ぬ變つた我聲を強て其問に答へ、吹雪もなく、玄關内の一條もなく、落膽もなきが如くにもてなし升た。

此通りにして一日〳〵と暮らし、ある日野邊に雪も消える頃壯年は逍遙してフト角を曲る時に、彼の婦人に出逢ひ升た。その時感が頻りに切まつて身を戰わせ、言葉も心のまゝには出ませんでした。互に安否を問ふ普通の挨拶が濟み升て、婦人は行過ようとし升た時、壯年はいかにも其愛らしさと己れの苦痛が堪へがたくなり、思ひ切つて「ミユーリエルさん」と呼かけ升と、呼ばれて振り向く處へたてかけて、「あなたを慕ふ僕の心は知つておいでだらう」といひ出し升と、婦人は「ハイ」と答へて嘆息を洩らし升た。壯年はまた、「失禮です、實に失禮ですが、判然あなたの口から聞いて安心し度いのです、先ごろあなたが御一處で有つた方が將來あなたを妻と呼ぶ方ですか？」「ハイ、先づさう望んで居り升のです」といひさま顏はさくらの色を散し、意中の人を思ふて我知らず眼色まで優しくなり升た。かくしとやかに愛らしく恥らふ躰に其問に答へたる婦人を眺めつゝ、たほやかに見えても處詮此婦人を己がものに出來ぬとおもひ、其運命を反復するに己が力の甲斐なきを思ひ、堪へ難き苦痛を追反さんとして歯を食ひしばり、見開ひた眼は炎の如くに輝き升た。婦人は雄士の濃情なるに驚き、其熱心に呑まれて、しばらく躊躇らひつゝ熱情ある人の心の戰ひ、常ならぬ悲痛にもがいて戀愛の羈を逃れ得ぬ處を眼り見て、計り知られぬ深淵に臨む人の如く身を戰はせて居り升た。

軈て漸く己れに反り、暇乞せんとして、握手する時、壯年は「打明けて下さつて何より有難く思ひ升、幾分か御迷惑な廉も有ましたらう」といふと婦人は顏に倘ほホンノリと紅を殘して、「いゝへ、それは判然あなたに申上るが至當です、併し御親戚や、御朋友にはお秘しなさつて下さい、兩人とも余り人に其とを知らるゝを厭ひ升からと、いひ升た壯年はかふ聞いてひどく驚ろき、急いで其驚ろきを匿し升たが、婦人は其樣子を見てとり、急に冷淡な氣高い素振りに變り、「あの方が須臾人に秘す樣においひですから、私も同意して居るのです」と言ひ放ち、立ろに別れてしまひ升た「それからは祝宴に出逢ても、野外や會堂に顏を合せても、いつも冷淡にして居り升た。壯年が件の處置を餘り感心せぬといふ樣子を見せて、俄かに匿したのを甚だ面白くなく感じ升て、心の中に「あの人が尋ねたとに返答をして遣つたのはこちらの惠みといふものだの

に、却て驚いた風をする、わたしは、物をいふて驚かれるは大嫌らひ、增してあの樣な素振りを見せられては」と思升た。

批評

○基督信徒のなぐさめ

余は今ま一書を讀み了り、將に感激する所ろを記さんとす。此書は友人内村鑑三君の著なり。客月、大坂にて君と會せし時、君は日ならず此書を出版すべきにより、一評を寄せよと告げたり。近ごろ、君俄然上京し、近日いよ〳〵彼書を致すべし、必らず一評を與へよと告げたり。而して其書は題して、基督信徒のなぐさめ (Cosolation of a christian) と云はんとすと。余は、首肯して諾せり。何んとなれば、余は頑骨君の如き人が、かく再應余に評を促すの衷情切なる者あるヿを知りたるゆえ也。果して、今日書店主人より此書一册を受たり。披らきて、其目錄を讀めば、乃はち、左の如し、

第一章　愛するものの失せし時
第二章　國人に捨られし時
第三章　基督敎會に捨られし時
第四章　事業に失敗せし時
第五章　貧に迫りし時
第六章　不具の病に罹りし時

嗚呼、余は、全卷を通讀するヿを要せざる也。讀まざるも既に、彼人の衷心を知るヿを得る也。左れど、心の感切する所が、何如に其筆を動かし、其筆何如に涙滴を點じて、多情多感の文を成せしやを見んと欲し、輙はち之を讀みたり。

嗚呼、余は、之を評するに堪へざる也。たゞ、左に數節を摘出して、未讀の知人に紹介せん。文を裂くは、情を割るの心地すれど、實に止むヿを得ざる也。

其の罰の事に思ひ至るや、則はち云く

愛する父よ、余は信ず爾は我等を罰せん爲めに艱難を下し賜はざる事を、罰なる語は爾が如何なるものなる乎を知るものゝ字典に存すべき語にあらざるなり、罰は法律上の語をして基督敎てふ法律以上の範圍に於て要もなき意味もなき名詞なり、若し強て此語を存せんとならば「暗く見る神の惠」なる定義を附して存すべきなり、刑罰なる語を以て爾に愛せらるゝ者を屢々威嚇する爾の敎役者を

して再び爾の聖書を探らしめ、彼等の誤謬を改しめよ。

其の亡妻の爲に悔ゆるや、則はち曰く

余は余の失ひしものを思ふ毎に余をして常に斷腸後悔殆ど堪ゆる能はざるなり、彼が世に存せし間余は彼の愛に慣れ、時には不與を以て彼の微笑に報ひ、彼の眞意を解せずして彼の余に對する苦慮を增加し、時には彼を呵嘖し、甚しきに至りては彼の病中余の援助を乞ふに當ては假令數月間の看護の爲めに余の身も精神も疲れたるにもせよ、荒らかなる言語を以て之に應ぜざりし事ありたり彼れは渾て柔和に渾て忠實なるに我は幾度か嚴酷にして不實なりしや、之を思へば余は地に耻ぢ天に耻ぢ、報ゆべきの彼は失せ、宥を乞ふの人はなく、余は悔ひ能はざるの後悔に困められ、無限地獄の火の中に我身で我身を責め立てたり

彼は米國に於て「日本武士」「大和男子」と誇りたり、而してのち歸朝し、故ありて多くの知人に謗らるゝや、則ち云く、

今は日本狂と稱せられて却て大に喜悦せり、然るに今や此賴みし國人に捨てられて、余は皈るに故山なく、需むるに朋友なきに至れり、如斯ありしと知りしならば友を外國に需め置きしものを、如斯ありしと知りしならば余の國を高めんが爲めに强く外國を譏らざりしものを、余の位置は可憫の婦女子がその賴みに賴みし良人に貞操を立むが爲め頻りに良人を頌揚せる後或る些少の誤解より此最愛の良人に離縁されし時の如く、天の下には身を隱すに家なく、他人に顏を會し得ず孤獨淋しき言はん方なきに至れり。

彼は、基督教會より退ぞきし時に、初めて公平なる宗教思想を得たりと云へり、曰く

嗚呼余は余が佗人をさばきし如くさばかれたり(馬太七章一、二)余も教會にありし間は余の教會外の人を譏するに當てかくありしなり、基督教を信ぜざるが故に未信者は皆信用すべからざるものなり、法王に賴むが故に天主教徒は汚穢なり豚兒(Foul. Swine,ルーテルの語)なり、魯國宣教師に教化されし、希臘教徒は國賊なり、監督教會は英國が世界を掠奪せんが爲の機關にして其信徒は黃白の爲に使役せらるゝ探偵なり、長老教會は野望人士の

集會處なり、メソヂスト教會は不用人物の巣窟なり、クエーカル派は僞善なり、ユニテリアン派は偶像敎に勝る異端なりと、若し某氏の宗敎事業の盛なるを聞けば曰、彼れ世人に諂ふが故に彼の敎會に聽衆多しと、某氏の學校の隆盛を聞けば曰く彼高貴に媚ぶるが故に成功したりと、余は思へらく眞正の善人にして余と說を仝ふせざるの理由なしと、天主敎徒たり、ユニテリアンたり、メソヂストたり、プレスビテリヤンたり、皆各々肉慾の充たすべきものあればこそ然るなれと、然れども敎會に捨てられてより余の眼は開き、余の推察の情は頓に增加せり學說を異にしても本心は善人たるを得べし、との大眞理は余は此時に於て始めて學び得たり、眞理は余一人の有にあらずして宇宙に存在する凡ての善人の有たる事を知たり、心の奧底より天主敎徒たる人を余は想像し得るに至れり、余は始めて世界に宗敎の多き理由と同宗敎內に宗派の多く存在する理由とを解せり、

末段、左の一段を讀むもの、誰か淚に咽ばざるものあるべき、

然れども余も社交的の人間として時には人爲の禮拜堂に集ひ衆と共に神を讃め共に祈るの快を欲せざるにあらず、敎會の危險物たる余は起て余の感情を述べ他を勸むるの特權なければ、余は竊かに坐を會堂の一隅燈光暗き處に占め、心に衆と共に歌ひ、心に衆と共に祈らん、異端の巨魁たる余は公然高壇の上に立ち肅然福音を演べ傳ふるの許可を有せざれば、余は鰥寡孤獨憂に沈むもの、或は貧困襤衣にして人目を憚るもの、或は罪に耻て暗處に神の免を求むるものゝ許を問ひ、ナザレの耶蘇の貧と孤獨と惠とを語らん、嗚呼神よ余は敎會を去ても爾を去る能はざるなり、敎會に捨てらるゝ不孝は不孝なるべけれ共爾に捨てられざれば足れり、願くは敎會に捨てられしの故を以て余をして爾を離れざらしめよ。

余は、神に感謝す、汝は石を變へて人となす如く、吾等の頑硬なるを化へて、愛の人となるとを得せしむ。吾等の路は、險しかりき、左れど今は之を顧て、其景の美きを賞賛へん。

"That care and trial seen at last,
through memory's sunset air,
Like Mountain ranges overpast,
in Purple distance fair."—Whitteer.

○文明雜誌

方今の文明時代に、而も「文明」の二字を冠したる一種異様の新雜誌出でたり、編者は頓智協會の名さ共に多少世に知られたる、宮武外骨氏也。今ま、其の第一號さ、附錄「人を驚ろかす法」とを讀むに、分り切つたるを特更ら六かしく說明する所ろ面白し、亦きまり切つたる意味を異樣に說を變ゆる所面白し、意外の例さ、意外の引抄さを爲し、殆んど無學なりやさ思はする所ろ面白し、而して之を一貫し一つの天才を現はす。亦是れ文明時代の妙品なるべし。

○依田百川自傳

庚寅雜誌第七十二號に百川君の自傳を載す、中に左の如き句あり、

幼羸弱多病、群兒遊戲、擲石投瓦、百川見之、怯不敢出、人笑之爲弱蟲、長學劔、時々與人角、輙輸、放箭皆不中。百川黑瘦多髯、身無縛雞之力、過中年頭髮盡白、壯歲沾沾自喜、頗冀切名。文不甚鍛錬、而一氣貫注、自有骨力。百川所著、一以勸善懲惡爲主、人毀其陳腐、乃毅然曰、洋人竊於才而慳於德、使今少年稍川箘、寧不後悔乎。爲人傲岸不飾邊幅、言衝口而發、略無忌憚、其在集議院頗以多口見毀、友人川田剛作原才一篇、痛戒其負才傲物、百川慙謝、然不能悛也。嘗命工寫眞、西村茂樹觀之、戯曰是王敦桓溫也。中根淑曰、若使百川不善文章以發述遺悶則陷國事犯永爲囹圄中人矣。

如此の自傳は、常士の容易すく作ると能はざる者、而して人の俄かに承知せざる所ろのものなり。此の儒者先生より、アウトビヲグラヒーの躰を創められんさは思はざりき。

○千島拓植

千島拓植事業に就て、郡司成忠氏が演說せられたるものゝ筆記、「精神」は第一號の附錄さなりぬ。其決心の由來、拓植の方法、資金等細かに、演說せらる。初め岡本翁を頭に戴きて從事せんさ決心せしに、翁が去年尊瓢然歸京せしを憾みさし、面前、前の決心を取消したる一條の如き、能く郡司氏の氣質を示すなり。

○ロード、テニソン

テニソン逝きてより、本邦の雜誌中、未だ之さ云ふ傳紀を揭げしものあらず、蓋しテニソンを愛重する人、本邦に尙ほ多からず、偶たま之あるさきは、慣れて容易すく之を傳するとを肯んぜざる也。日本評論紙上に、太はだ短かくして而して意長き一吊文の出でし以來、吾が黨の心を得しもの尙多からぬぞ憾みなれ。日曜叢誌第四十號に少さか見るべきもの出づ。蓋し、カークス女史の筆か。侍醫アンドリウ、クラーク氏が、テニソンの死に關して當時の新聞紙に報ドたる、其文は枯落せる診斷書の如くならず、寧ろ一篇の詩の如くなりしものさ云ふを譯せし一節に云く、

ロード、テニソンは最とも光輝ある狀態を以て死せり。凡そ余が經驗中未だ斯の如きものを見ず、室内は暗くして珍瓏たる月光の外一點の燈火を置かず、柔かなる月光、床上に落ち、世を逝る詩人の顏に映ドて、恰かも月暈の狀をなせり。

○支那と一戰せざる可らず

鼎軒が、「東亞之大勢」を評する中に云く、

國家の親和さは、嫁さ姑が互に心中に怨み乍らも互に耐忍して親愛を裝ふが如きものにあらず、其爭ふ所は利害にあり、利害にして衝突せば豈に一戰せざるべけんや。余輩の朝鮮に於ける政策は須らく我人民並に商業を保護するに止むべし、決して朝鮮の保護國さ云ふが如き大任を期するなかれ、而して我人民並に商業の保護を完うせんさするや必ず支那さ衝突すべし、此時に及びては唯々一戰あるのみ、夫れ擶稱者の大關さなるは單に大食するにあらず、角力するにあるなり、日本をして强國さならしめんさ欲せば豈に戰爭せざるべけんや、而して其敵手は現今に於ては支那に如くなし、何さなれば彼未だ餘り强からず、又餘り弱からざればなり、斯くて數々戰爭を爲し、彼も强國さなり彼も强國さなりし後に至れば、共に提携して朝鮮の保護國さ誇稱するも始めて能く其任を完うすべきなり。

少しく無責任の壯語なれども、一理ありさして味はふべし。

片々

淡海子編

●名古屋青年會通信

◎遊廓移轉　廢娼の議遂に已む可からざるなり、左れども吾人之が爲に流涕すれば世人却て之を冷笑し去る、吾人之が爲に絶叫すれば世人却て之を嘲弄し去る、世界の腐敗も亦甚しき哉、我名古屋なる基督教徒は嘗て遊廓廢止を縣會に建議せしさき、幸にして名古屋市の新聞の如きは聲を合して之を賛したれども常に其議を用ひられず吾人をして倒底之を用ゆるの人なきを歎ぜしめたり、然るに突然頃に突然昨年の愛知縣會は風俗を害するさ云ふを以て、市外に遊廓を移轉せしむるの議を大多數を以て可決せり、吾人をして云はしめば區々たる移轉説の如きは是れ五十歩百歩の爭ならざるなきを得んや、已に遊廓の風俗に及ほす影響如何を識り得しならば、宜しく世界の外に移轉せしむ可きなり、然れども此議員の此議決の眞主意は風俗如何に因るならずして、別に裏面に横はる經濟的の理由あるに由るが如し、其は兎に角吾人は此議決が廢娼に向つて一歩を進みたる者として、之を歡迎せんさするに、我縣知事は今に至るまで何の音沙汰なく遊廓の樓主等は、非移轉の爲に奔走す、我會亦爲すあらんさせしが今や未だ運動す可きの好時機ならずさ云ふ者ありて、其説に從ふとさなれり、今聞く所によれば名古屋南部の民幾千百連署して非移轉の議を出せりさ、何等の痴漢ぞや、更に聞く當市の壯士輩中、縣會の議決を重んぜずして非移轉を説く如きは不都合なりさて、戸毎に非移轉建議者に就きて論難する所ありさ云ふ、亦快ならずや、評する者あり曰く我縣知事は民心を容るゝの人なり、必ず縣會の議を容る可しさ吾人は此語が正鵠を得たるの評たらんとを望む。

◎聖經書類取次販賣　我青年會が其經費を賛助員に仰ぎ來りしは固さ本會の本意にあらず、又此くの如くにては倒底充分運動すべきだけの經費を得ると難し、故に吾人は常に其獨立自給の道を求むると久しかりしが、東京なる醫醒社さ特約を締ふて聖經書類取次販賣を初む可しさ云ふ者あり、曰く資本を要せざるなくんば曰く幾分の經費を補ふるに足る可しさ、由て本會は總會を開きて之を議せんさするに際し、東京青年會なる丹羽清二郎氏當市に來る、由て語るに此企圖を以てす氏大に之を賛し約するに周旋の勞を以てす、後一月十六日本會は總會に由りて之を初むるに決し、委員を正木康藏氏さす、其後醫醒社は本會の請を承諾する旨を答へたり、思ふに此事業たる僅かに利益の幾分を得るに過ぎずして、其利固より多からざる可しさ雖ども、是れ多少自給自立に向つて歩を進め得べき所以ならずや、尚ほ本會は本會が獨立自給し得るに足る可き事業を發見せり、不日總會に由て之れを執る可きや否やを議せんさす、他日之れに關しては追て報告する所ある可し。

●久留米青年會通信

拜啓申上るも愧入次第に候へ共、又々我久留米に於て妓樓新設の計畫起り、既に當市西隅瀨の下さ申處に置かんさ、同處の區長市會議員等主さなり承諾の調印濟さ相成、來月初旬より開かるゝ市會に提出し其賛成を得て、縣廳に出頭の運に御座候由、生等之を聞きしは數日前にして、其秘密にして斯くも相運び居就ては驚入たる次第に御座候御存じの如く、既に當年にて四回目に御座候、市會議員の大勢、放任致し置けは無論可論者多數を有して居候故、此際非常に運動を成さざれば折角昨年迄打勝したるとも水泡さ相成候故、勢力ある有志家、各學校教員青年等さ協議の上、大運動を成すの決心に御座候、何分にも當年は我キリスト教の友少數にて困難なるも、主義は違へ正義の友澤山相提携して、必ず全勝を期し彼の不潔の物の撲滅せざれば止まざる決心に御座候、就ては昨年迄は廢娼に必要なる書類有之候故都合宜しく御座候處、最早殘り少く相成微力なる生等へ御助力御情心を以て、何ぞ好材料御座候はゞ御送付被下間敷哉、此儀御窺申上候、且又此儀に就ても細大御報告可申上候、願くは當地の爲御祈り給はらんとを願上候、先は御通知旁如斯に御座候早々。

二月廿五日　久留米キリスト教青年會員　淺田六郎

●山口縣廢娼運動通信

陳ば本郡萩町々會議員其他有志者の間に於て、今回新に遊廓を萩市内に設置するの議に決し、已に協議粗ぼ相纏りたる趣、右に就ては少數なる基教徒に始め心有る者に於ては頻りに反對の運動を試み居申候得共勢力の趣く處衆寡敵に難き非境誠に痛歎の至りに御座候、今日の形勢にては其大勢は挽回するは極めて困難の業に屬し、成效頗る無覺束奉存候へ共、同志さ結託し聊か微力を竭し度さ愚仕候間、廢娼に關する諸大家の名論統計表等其他總て廢娼の論證さ爲る可き、有益なる資料御座候はゞ御指圖被下間敷哉貴社は多年此事に竭し熱心御盡力被成候事故特に前願に申上候間微衷御推察被下速に御教示被成下度單に奉願候、先は右御願迄如此に御座候敬具。

●丹波通信

◎基督教主義の青年會の嚆矢　捻山は戸數八十戸余一小村落にして、從て信徒の數二十名に過ぎず、當地は凡て宗教には冷淡さ云ふに非らざるも、教勢振はざりしが客年八月、當地信徒の青年二三名發起し、基督教主義の青年會を設立し、已に三回開會せり、會員の數も僅々拾名余、皆熱心之に從事し、當地方の汚氣を一掃せんさ企望し居れり、全能なる主は好なる御手を以て當地青年を導き、玆に本會を起さしむ、余輩神の深遠なる攝理を悟り、他日本會の隆盛を期し感謝に堪へざるなり、主にある愛兄姉本會の爲に熱祈あらんとを希ふ。

不可とするや、殆ど極端に走る、ルッソウは寧ろ書物を忌み憎むに至れり、かくてエミールの教育は第十二歳に至る迄は、書物と云へる物は、果して何如なる物なりやと云ふをすら知らしむ可らずと云へり。嘗て曰く、余は書籍を憎む、書籍は己が知らざるヿを話す術を教ゆるもののみと、されば エミールの教科には、一書を用いず、只一つ讀みて可なるは、ロビンソン、クルーソウのみ之れ蓋し其全躰の旨向相均しく社會を離れて獨自一己の捿居を主張する者なるが故なり。

書物は意見を表す者なり、其文字は意見の思想を一々書き表すもの也。左れば幼き者は其形に僻して、其思想に入るヿを難し、故になる可く書を用ひざるを可とす、直接に天然物に觸れしむるか、又は直接教師の思想にふれしむ可し、其間に文字書物を挾む可らざるなり、日本從來の誤過頗る此の點に多し、床の間に山水を寫せし小さき幅を見て、出て偉なる山水を直感せしむるが如く、文字に偏よりて思想を後にするの通弊あり、此の如き通弊に對してルエミールに於けるルッソウの過激なる論辯も尚ほ聞いて用ゆ可しと云はん、左れど教科書に全く書物を廢す可きにあらず、殊に子弟長じ、その文字の裏に思想を透觀するを得可き樣の格に達したらんには書によりて教ゆるは極めて簡便、且つ極めて迅速の法たる可し、只人の性とかく物に僻して、無形の想を後にするの通弊あるが故、之を教ゆる者は常に此通弊に失せざるの覺悟を存す可きなり。

(十六)、教授法

曰く、幼兒をして其理解するヿを能はざる論辯を聞かしむるヿなかれ。教師の講述には一の叙事躰、一の雄辯、一の形容詞を要せず、只其幼兒に相當したる目的を示す已にて足れり、教ゆる人の感想が直ちに教へらるゝ子の感念となる可きなり、然れども、感觸す可き有形物より、一躍して無形の智識上の目的物にとばしむるヿ勿れ、順次漸々に時至りて其進歩を段々たらしめよ、要するに實物の代りに標形を用ゆ可らず之を用ゆるは只其實物を得るヿを能はざるの時にのみ限る可しと、又曰く余は說明又は談話と云ふ事を好まず、大切なるは實物なり、實物なるかなく、今の教育者が余り多く重きを其言語の上にをくの誤を指辨するも尚足らざるを覺ゆ、「多言の教育は只多言の子を生ずるのみ、(Bubbling education make only bubbles.)と。此教授法の說も又過激の弊を存するの失あり、左れど又多くの眞理を存す。ソクラテース、歐陽明の流、知は即ち知なり、行ひ難きば知に非ずと云ふ、又之れ極端の說と雖も、同じく同一の眞理を示す、凡そ知るは經驗の結果なり、未だ經驗せざるヿは、之を知る頗る難し。而して已に經驗せしヿより一歩を推して究知するは極めて易く、又元より行ひ易きなり。斯るを眞の「知る」とは云ふと。此說一理なきに非ず、要するに人に教ゆるには其從來已に確知せる行即ち其從來已に多く經驗せしヿを取り、之を利用して以て新智識を得せしむるの法を知らざる可からず。ルッソーの言元より過激なりとは雖も、よく此大切なる眞理を示すものなり。

(十七)、動元刺激の時期、

人の動作を刺激するに或る年代、或る發達に從ひて、尤も感じ易き感覺相違す、之を動元(モテーヴ)の相違と云ふ、此相違をよく認知し、之に從て刺擊を施すの覺悟を造るヿ極めて緊要なりとて、エミールには年代に從て明らかに其動元の區別あるヿを示せり。曰く、十二歳に至る迄には專ら必要によりて刺擊せらる、即ち外物の刺擊により必要に迫まれて動くヿ多し、故に十二歳迄の取扱方は必しも人間と云はず、一種の天然物とし之に加はりたる天然力の中出來可きはなし、出來がたきはなさゞるの躰にて其必要の儘動作せしむ可し。十二歳に達すれば既に幾分の判斷力あり、故に此判斷力に訴へ、其動元によりて動作せしむる樣に取扱ふべし、而して此判斷力は利益を主とする功利主義の判斷ならん、さて十五歳に達すれば、已に情に訴て其動元により動作せしむるヿを得、即ち必要の故にあらず、利益の故にあらず、更に高尚、善良、大氣ある心根によりて動作するに至らしむるヿを得と。

年代によりて動元の增加伸張を計るはよし、左れど生る人間は斯の如く分割し其年齡によりて、かく迄明白に動元を限るは誤なり、必要利益、感情、道念等の動元は何れの年代に於ても、同じく刺擊せざる可らず、或年代に於て只其一にのみ訴ふ可からざる也。然れども年と共に此動元に多少あるは云ふ迄もなし。

(十八)、商法自活の道

エミールは十五歳に至り歷史を知らず、人情を知らず、文辭美術をしらず、又神と云へる事に付きて毫も知るヿあらず。然れども、商賣手工上の商賣といへるものは知る可し。之れ一朝何事かの變動あらんとき、自ら活くる用をなさんが爲なりと、ルッソウかつて曰く、今や改革世紀の近づきつゝあるなり、此時に當りて人

々何如になる可きや、今日其保證を與ふるもの決してなし。歐洲の大王國の王と云へども最早此の上長く續くとあるまじ、彼等は既に榮華の頂點を越へたり。監然として今盛りなる多くの國家も、もはや降り路にありと。斯る志想ありて人の子の教育を論ず。故に何よりも先づ自活の職業を大切とし、エミールをして之を學ばしめたり、

(十九)、十五才に於るエミール、

第三卷の終り、即ちエミールの十五才に達せしときの言動風采は如何、ルッソウ之を記して曰く、此時、エミールは僅かの智識を有せり、左れど其少かの智識は皆實に彼自身の所有なり、彼は其所有する者を全体一々知り悉し全分半齡の智識に止る者なし、其知れるものは少なけれど、皆よく知れり。他人の知りて而してエミールの知らざるもの多し、左れどそは他日知るとを得可し、未だ知らざる者と云ふとを歎ぜば世人悉く知るとの外にも倘ほ何人の知らざる者ある可し。知るの貴きはよく知るにあり、エミールは、知れると少なし、然れども普通普用の心(ユニバーサル、マインド)を存す。未だ實に知らすと云へども此心を用ひて其未だ知らざる智識を知るとを得べし、エミールは敏捷開豁にして、万事を知るに堪ゆる心を有す。即ちモンテーンの云へる「未だ教へずと云へども之を覺ゆるに足るの心」を有す。余は滿足すエミールは其なす所の万事に於て、之れ何の善の爲めぞやと云ひ其信ずる所ろの万事て於て、之れ何の理の爲ぞやと云ふの習慣を得たり。要するに、吾目的は、彼に智識を與へんとに非ず、必要あるとき、如何にして其智識を得べきやの術を教へんとにてありき。又智識なるもの、眞の價値をしり、万物に越へて之を愛す可きとを知らしめんとにてありき此故に余が教育の方法に於ては進歩甚だをそし、然れども一も誤りたる歩みなし、一旦の歩みも繰り返さしむ可き掛念もなし。ルッソウが想像的教育の方法によりて斯如き結果を得べきや否やは、之れ別問題なり。されど智識を與ふるの目的は即ち斯の如く又其教育の結果にして、かくならんとは當然の理想なりとす。

(二十)、以上第三卷十二才より十五才に至る迄の教育は、所謂判斷力の動元を刺激し、實用の學科を教へたるものなり。第四卷に入りて感情及宗教上の動元を刺擊するの教育初まる、其大意を例の如く摘載すれば左の如し、

(廿一)、此卷に入りて、ルッソウが所謂テリキウアの教育なるものゝ極めて不足せるとを確む、凡そ人の感情を養ふは人なり、人の中の母なり。然るにエミールは母の膝下に居せず、ホームの中に住せず又共に交はる可き友もあらず、何を以てか其感情を養ふとを得ん、殊に宗教上の感想に至りて所謂自然的の教師のみにて足らざるは古來巳に定論あるなり、されどルッソウは物質界の自然をのみ用いて此感情及び宗教上の感想を現はさんとし殊に一定の學科を示すが如き方法にて之を發はんとするは頗ぶる不可也。

(廿二)、道德上の德育、

ルッソウは、思へらく、善惡を區別するの道念は同情(Sympathy)及び社交上仁惠(Social benevolence)の感より根すと、故に此感を養ふを以て德育の主眼とせり。曰く、人の心の發情は、自ら良心の想を現はせり。愛憎の感の中には、已に善惡の種を兆す、されば善と云ひ、正と云ふとは智性にして判斷認識したる抽象的の辭にはあらず、實に道理にて研きたる靈魂の實際の感情なりと。されど此感情を養ふのみにて德育全しと云ふ可らず、後回德育を論ずるの章に於て批評す可し。

(廿三)、宗教上の教育、

宗教々育を十六歳乃至十八歳迄延引す可しと云ふは幼兒が其感情的の想像をもて神を拜せしに、却て之を偶像にするの恐れあるべしと案ずればなり。曰く、凡そ一度想像の力をもて神を見とめなば智性をもて之を知るを極めて難し蓋し幼にして神を拜せしむるときは迷に入り、其心正しく進む可からずとなすなり。故に相應の發達をなし、理性の眞理を認むる事を得るの時代に達する迄は之に宗教を語る可らず、之れ宗教のため利益なりとは云ふ。此の說尤も不可なり、人の宗教上の思想の暫時に進歩す可き者なり、例へ年長ト相應の理性を延し得たる曉と雖も其宗教上の思想決して純の純たる者となる可らざるなり、所謂大哲學なるものゝ信仰と云ふと雖も、異日更に進歩したる日の信仰より之を顧みれば、又之れ一種の迷想を混下たるとなからんか、宗教上の思想に敬む可きは其智識にあらずして、其信仰にあり、而して信仰は人の天性に十六乃至十八の年に至りて初めて生ずる者にはあらざるなり、故に宗教々育は德育と均しく決して十五以後に至りて初めて施す可きものにあらず、尤とも幼なるの時

より之を施す可きなり、只其方法に至りては年代に隨て異らしめざる可らず。ゼルマンの哲學者センテニスの記事――――むしろ其心理上の懺悔の記の如きものに曰く、センテニスの父はエミールの說を用いて彼を教育したり、彼れ優しき母を幼にして失ふ、父は學識深慮ある君子なりしが即ち彼を伴つて片田舍に隱れ、他人に交通するとを遮斷して天然物により彼を教育開發したり、書物を用いず、直接に言語を學ばしめ、且つ尤も注意して神の事を言ひきかすとなかりき、さればセンテニスは十歲に至るまで神と云ふ此大なる名を讀み、又きくとなかりし也、されど其心は自からにして之を感ぜしが每朝東天に登る日輪を見て全能の恩人の如く思はれしかば、朝な〳〵ひれ伏し、之を拜するの習慣を自ら作りぬ、其父甚だ不審しみ一朝其實を見て其誤を正し、日輪は之れ空間にある一の星にすぎざる由を教示したり、センテニス之を聽きて失望を究め其禮拜す可き物を奪ひ取られて深痛せり、其歎き非常にして見るに堪へざりしかば其父遂に胸を打たる、止むとを得ず實を告げて天地間に眞の神一の造主あるとを教示したりしとぞ。人が神を知るは其天性なり、習慣若しくは誤れる激論ありて此自然を消さんとすと云ふと雖とも天眞久しく隱るゝを能はず、異樣變形の姿を取りてだに表に現せずと云ふとなし、

（廿四）、女子教育、

エミールの最後に女子教育の事に說き及ぼしぬ、之れエミールの同伴者たるソフヒーを出さんが爲也。此故に女は只男の爲めに存する者の如くに解し、其教育法に至りては自ら欠くる所多し。曰く女子の教育は男子の教育に關係連交し、之に比較的に存す可きとを忘る可らず、其主旨は男子を喜ばせ男子の爲めに從ひ立ち、男子に稱められ愛せられ子供を教育し老父を助け男子に助言し慰め男子の爲めに生涯を樂しくし面白くするに足るが如き女子を育するにあり。之れ即ち何の年代に在るに係らず常に女子の義務とす可き所ろなりと。「ミチエレット」曰く民人は妻を創造すと、ルッソウ又此意見を所有し女子は婚姻後初めて生るゝ物の如くに考へたり。故にソフイーを教へ導き之を如何なる摸型となさんかはエミール自身の理想の中にありとしたり。只其宗教の事に至りてはエミールは長じて後初めて之を學ぶべしと云へど、ソフイーは極めて幼き時より之を學ぶべし、之れ順從服從の德を得るが爲なりと。而して尤も長ずべきは裁縫なり。ルッソウ曰く、ソフヒーが尤もよく知れる者即ち尤も注意して教へられたる者は女性たる者の工事即ち彼女は針仕事(Neddlework)の中にていかなる事にてもなし難き事あらずと。之れルッソーがある教育においてほこる所なり。

（廿五）、以上は即ちエミール全卷の摘要なり。カムペーヤ之を總稱して曰く、エミールの新價値を辨ぜんには其末段に記したる論辨を讀て感ずる不快の思ひを先づ放擲せざる可らず、エミールを評する者は、之を全體の上より大觀す可し、其各部分に小入するを勿れ。要するに此書の大體は嘆美す可し、深長なり、若し之を解剖すれば即ち其味を存す、其眞價値をしらんには、全く通讀するとを要す、之を通讀せばルッソウが言を一寫万鋌したる感情と直接に其温き情にふれ知るとを得讀人は其誤謬をゆるし、其迷惑をゆるし却て通讀の折一歩〳〵に出合ふ可き洪大なる眞理を取らざる可からず、殊に讀人がルッソウが此書をあらはしたる當時の時勢を辨知せざる可からず、之を著はしたる當時の時の情を參酌せざる可からず、若し三十年後革命の曉自由なる民の爲めに之を著はしたらんには、エミールの調子も又一變したりしならん。ルッソウにして若し共和黨の社會、若しくは共和黨の社會たらんと欲する社會の爲めにエミールを著せば、彼は決して實際と云ふ者を嫌惡せず、かく迄に矯激孤獨なる教育をよしとせざりしなる可し、此評實に公平穩當なり、カント之を評して曰く、凡そ虛榮の爲め、又時を費さんが爲めに讀むに非ずして、眞に書を讀まんとするの人にしてエミールを讀まば（ルッソウの書を讀まばとあり。）先づ第一に感動するは彼が驚く可き天才の感動力と高尚なるインスピレーションと感情に充ち〳〵たる靈魂に觸るゝとにて、他の時代、他の國、他の記者に於て決して出逢はざる所ろの者なり。之に付て、直ちに感ずるは彼が發表する思想の非常にして、且つ解し難きとより生ずる驚歎なり…………余はルッソウを一讀し再讀し、其文體の美が余を感動せざるに至り而して後ち初めて余が理性をもて彼を評せざる可らずと、エミールの人を動かすと實に斯の如きなり、左れば其出版後當時を激動せしとの甚しき實に驚く可き者ありき。モルレー曰くエミールは之れ文學の歷史中に存する尤も急激なる者の一なり、堆積せる僻見、黯澹たる頑結せる習慣を打破し教育を暗き機械的の技術の一となしたる通弊を清拂し去り以て洪明清氣の洪波を密閉せる育兒園學校室の中に透射せしめたるは、皆エミールの功德なり。

三段　ネーチュア

(一)疊山を出で丶流水に浮ぶ時は快云ふ可からず局促細末なる束縛の天地を離れて廣々漠々なる大宇宙を望むは樂み如何ぞや末節末技に拘々たりし教育論よりして彼の偉大なるネーチュアの論に從るときは快樂例へがたしルッソー先づ之を主唱しペスタロッヂ、フレーベルを經て近世スペンサーに至る迄其ネーチュア論(放任教育論)一陸離として光彩を放ち顧眄として天下の大喝采を博するに至りたるは抑々當然なり

(二)左れば暫らく思を潜め靜に沈思して抑々所謂ネーチュアとは果して如何なる者ぞと究問すべし頗る漠然たる心地なきにしもあらドイー、アル、シル女史奇警の言葉を放ちて曰く教育論に於ける普通の詭辯の十分の九は彼のネーチュアといへる文字の意味を明瞭にする事をもて解散するを得可しとゼレミー、ベンタム又曰くネーチュアなるものは一種の女神にして極めて人望ある女神なり人は凡て善なりと認めたるものを悉く此女神の力に歸し之にて其善なる所以を確證し得たりと滿足す此解釋の方法は甚だ簡略なり此解釋法に倣ふもの多し之に註釋するもの多し之に類似したる先覺多し然れども此解釋は到底何物をも解釋せし事なし之によりて一層困難なる問題を生じ來れりと又曰くネーチュアなるものは一種の小說やの人物の如し書くにも談ずにも折々は此一人物を出現せしめざるを得ざるなり左れど之を誘引して毛氈の上に來らしむれば彼女は其當然の姿の儘にて出で來る即ち裸體の儘にて出て來る彼の女の本體は無一物なり如何なる資性にて飾るにもあらず貪む可き德性又は退く可き否德備ふるにもあらず即ち裸體なりと吾人ネーチュアの意味を考ふる時漠然として捕束し難きものあり遂に斯の如き言語を發することを得ざることなきに非ずネーチュアなる文學は一種のステーションなり八方の論線を暫らく此所に集止し而して后其正當なる方向に押す彼は暫らくの間の氣休めなり更に一層の深義を研究確定せずんばある可からず

(三)ネーチュアなる文學の奧義を確定せんとするに當り古來諸名家が之を使用したる形跡を畧叙し而してのち概括要決する所あらん

アリストートル曰くネーチュアに由りて或人は命令し或人は從服し之れ相互ひの安全の爲めなり蓋し全槪の分別の性を受けたる人はネーチュアに由りて優者たり智者たるべし只體力をもて勤務する事を得可き人は劣者なりネーチュアの奴隸たる可し又曰く如何なる狀態(ステート)も皆ネーチュアの工作なり社會上の最初の結付けはネーチュアなり万物若し完全なる狀態に達しなば之其物のネーチュアなり人にても馬にても家にても皆然りプラト曰くネーチュアの規則によれば不正の事に耐るは一層の不名譽なり云々ネーチュアの彼の女自身は教ゆるなり善人が惡人よりも多く所有するは正きことなりと如何なる理由によりてザーキセス、ヘラスを犯し其父シシャンスを侵せしが其は此等の兩人ネーチュアに從て働らく所の人の家なるが故なり然り天に由りて又ネーチュアの規則に從ひて働らく所の人なるが故なりとメニヤス曰く吾等成功を期して教へ若しくは學ばんには如何にすべき他なしネーチュアの(mode of operation.)働き方を發見し之に吾れ一身を適(アダプト)應和合(コモデート)せしむるにありネーチュアは之(サブゼクト)は相應適當したる時に來るなりネーチュアは之に形體を與ふるに先づ其材料を準備するなりネーチュアは其運動に相應せる物を取り上げて又は之を相應ならしむる爲に注意用心すネーチュアは其動作に於て混雜する事なし明白に一事より一事に進行すネーチュアは凡て其働きを內より外の方へ及ぼすネーチュアは大體より初めて特別個分に進むネーチュアは飛翔して進まず步々を重れて進むネーチュアは一度び進み行き初めては其工事を成就する迄然る事なしルッソー曰く注意してネーチュアを吟味せよ而して汝が爲めに開きたる其道に從ひ行けよ吾等が能力及び吾等が機關の內部に於て發達するはネーチュアが吾等に與へたる教育なり苛酷なる教師我儘なる兩親をして其徒らなる爭論を其儘携提してネーチュアの元に至らしめ彼等自身が方法を誇るの前先づネーチュア彼の女自身の方法を學ばしめよペスタロッヂ曰く吾等を善になす所の者は一人ネーチュアなり吾等を眞理と智慧とに導く所の者は敗腐するとなき援すと能はざる彼のネーチュア已なくも凡て教育の方法に二種の良き方法あることなし又ある事能はず良き方法は只一なり而して此只一のよき方法は必ずやネーチュアの永久なる方則の上に安んずる第一の教師はネーチュアなり其授業は幼兒の感覺が周圍の世界の感銘を受くるに足るものとなりたる瞬間時より初まるフレーベル曰く神の聖氣(スピリット)はネーチュアの力に休み生き且つ働らく其表はるゝやネーチュアに由る常にネーチュアの中に又はネーチュアに由りて成形す左れどネーチュア其れ自身が神の體なるにはあらず神は一軒の家の中に住ひ給はざると等しく又ネーチュアの中に住み給ふことなし只神の聖氣ネーチュアの中に入り以てネーチ

福羽美靜大人序
鈴木弘恭大人著

（半紙判日本綴）

再版 增補

文法口授 一名利文獨案內

特別賣價 金拾二錢　郵便稅 金二錢

目錄

（一）文と云もの丶譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

東京下六番町　女學雜誌社

東京赤坂區仲之町二番地三號より

當社又 東京麻布區霞町 廿一番地へ移轉す

注文通信共當所へ御遣し被下度候

但爲替振出局は從前通芝口郵便局の事

東京麻布區霞町二十一番地　護教社

內村鑑三先生著

紀念論文

コロムブスの功績

附 コロムブス傳

精美肖像地圖入

定價十六錢　郵稅四錢

著書がコロムブスの事跡を探究するに熱心なる既に世人の認むる所あり今やコロムブスの行蹟、コロムブスの傳記、補助者の性行論等を輯めて玆に一書を成すコロムブスの行蹟は曾て六合雜誌々上に顯れたるものを訂正したるものにて其論の痛切奇抜なると當時既に諸新聞の贊評せる所、傳記は諸書の粹を抜き精を聚め然も簡にして要を得たるもの而して補助者性行論の如き又一大快筆にしてコロムブスなる偉人物に就て益々悟る所あらしむ之に添ふるに鮮明なる肖像あり明細なる地圖あり、和洋對照したる年譜の如き鼇頭に入れたる地名人名原字の如き用意周到著書の偉人物を紹介せんとするの跡顯著たり吾人は我邦、未だコロムブスに就ける好著述なきを遺憾としき今や彼れを記念すべき空前の良期に當り此著者あつて此好著を得たり吾人焉んぞ其書を繙て其人を知らざるべけんや、

內村鑑三君著

基督信徒のなぐさめ

定價金貳拾錢　郵稅不用　（三月六日發賣）

目次

第一章　愛するものゝ失せし時
第二章　國人に捨られし時
第三章　基督教會に捨られし時
第四章　事業に失敗せし時
第五章　貧に迫りし時
第六章　不治の病に罹りし時
以上

著者の聲名、履歷、幷に本書の目錄は充分なる廣告なり

發兌元　東京新橋出雲町　警醒社書店

發賣所　東京下六番町六番地　女學雜誌社

皇后陛下
明宮殿下
御覧の書

（リツトルロ◦ードフ◦ホンツトルロイ）

再版 小公子

子供のよみ本 ✦ 若松しづ子譯

森田思軒居士の批評

余紛々たる世間の譯文に於て平生甚だ許可少なし獨り若松賤子の「小公子」に驚嘆す今「罪と罰」を得て又之を二にせむとす二書が皆な其文を俗話体に取りしは極て智なり苟も俗話を以て文となせば其詞を採り其の方式を求むるの齊くして且つ便なる車夫厨婢の偶語も直ちに我が文の資とならざる無し若し專ら雅言を用ひば「小公子」のフォントルロイが始て老侯爵に謁する處本書の醉漢が醉言する處の如き余は恐る縱ひ賤子不知庵が如意の筆を以てするも寫して今の文の半ばにも至るを得ること能はざるを余は是に於て益々世間の譯者の弱處が其詞に貧なるの一事に根する者多きを知る。



實價金貳拾八錢
郵税金八錢

發行所 東京麹町區下六番町六番地 女學雜誌社

取次所 東京◉東海堂、巖々堂、東京堂、武藏屋、警醒社、京都◉便利堂、東枝律、大坂◉岡島、梅原、神戸◉福音社、熊本◉草野、函館◉福音舍

裏錦

第五號（三月十五日發行）要目

- ●女學生の不運
- ●教育上に必要なる女性の熱愛……五
- ●内心の反省……德子
- ●悔改奇談（第三回）……南海散史
- ●過去の疑問（續稿）……白菊
- ●眞の女子……郁子
- ●茶のすさび……小衣子
- ●閨房の秀……織々女史
- ●戲曲 僞皇子（公卿館の塲 布告所の塲）……殘月庵譯
- ●露國女皇エカテリナ第二世……同
- ●雛遊の記……土筆庵
- ●露國文豪ツルゲーチフの書翰
- ●春の歌（マイコフ作）
- ●歌の種類（片歌、旋頭歌、垣歌、踏歌）……さくらとの翁
- ●日本韻文組立法批評……

定價一冊六錢六冊前金卅三錢十二冊前金六十錢市外
郵税一冊に付一錢

發行所 東京神田區駿河臺北甲賀町十三番地 尚絅社

大賣捌所 東京神田區表神保町三番地 東京堂

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割増の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は届け賃さも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價廣告料及無料廣告

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊金六錢　郵税金五厘

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料さす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三